

I. 人間基礎科学科目

（１）人文社会系科目

「人文社会系科目について」

1. 目的

- 1) 豊かな人間性をもつ真の教養人としての技術者の育成。
- 2) 多様な視点から物事を判断する能力の養成。
- 3) 自ら問題を発見し答えていく姿勢の強化。

目標

- 1) 選択必修科目では、人文・社会諸分野の多様な科目を履修し、幅広い視野から社会や文化との関わりの中に科学・技術を位置づける。
- 2) 上級科目では、少人数で双方向的な密度の濃い授業形態をとり、人文・社会諸分野のより高度な問題設定に取り組み、さらに視野を拡大する。
- 3) 自ら問題を発見し、それに答えていくという積極的学習態度の基盤を形成する。
- 4) 専門諸学の基礎となる論理的思考力と言語運用能力を養う。

2. 科目の内容

- ・具体的内容については、各科目のシラバスを参照。

3. 履修上の注意

- ・人文社会系選択必修科目では、全体を三つの科目群に分け、学科ごとに当該学期の履修科目群が指定される、指定科目群制度を取っている。学期始めに配布される説明プリントを熟読し、各学期の開講日に、履修を希望する授業に必ず出席すること。

哲学Ⅰ PhilosophyⅠ (月曜1限)

全学科 第1、2年次 前期 選択必修 2単位

担当教員 中村 雅之

1. 概要

●授業の概要

相対主義と普遍主義

古くから存在する相対主義と普遍主義の対立を、さまざまな分野について検討、考察し、現代では無意識のうちにとられがちな相対主義的思考の問題点を浮き彫りにする。

●授業の目的

哲学的な問題と解決への努力の実際を学ぶことにより、哲学的思考法の基本を身につける。

2. キーワード

相対主義、普遍主義、疑似科学

3. 到達目標

典型的な哲学的問題を素材に、さまざまな考え方を比較考量して、自ら思考し、判断する能力の基礎を作る。

4. 授業計画

- 第1回 相対主義とは何か
- 第2回 さまざまな相対主義
- 第3回 パラダイム相対主義
- 第4回 共約不可能性
- 第5回 科学と合理性
- 第6回 サイエンス・ウォーズ
- 第7回 疑似科学
- 第8回 文化相対主義
- 第9回 翻訳と文化
- 第10回 言語相対主義
- 第11回 サピア・ウォーフ仮説
- 第12回 道徳的相対主義
- 第13回 さまざまな道徳説
- 第14回 道徳の普遍
- 第15回 まとめ

5. 評価方法・基準

期末試験(約70%)および数回のノート提出(約30%)で評価する。

60点以上を合格とする。

6. 履修上の注意事項、授業時間外における学習等

以下の参考図書を、自宅学習に活用すること。

バーンスタイン,R.J.,『科学・解釈学・実践:客観主義と相対主義を超えて』1,2 (岩波書店,1990)

本館 閲覧室3階 研究用図書 401ⅡB-11Ⅱ1

7. 教科書・参考書

授業時に資料を配布。

8. オフィスアワー等

月曜日:15:00～16:00

哲学Ⅰ PhilosophyⅠ (月曜2限)

全学科 第1、2年次 前期 選択必修 2単位

担当教員 中村 雅之

1. 概要

●授業の概要

トランスヒューマニズム:人間改造の哲学

コンピュータ技術や医療技術の急速な発展によって、従来の「人間の条件」をも改変するような変革がもたらされるとの予測が一部でなされている。こうした技術発展が近い将来にもたらす可能性のある、人間観、倫理観の根本的変革が何をもたらすかを検討する。

●授業の目的

哲学的な問題と解決への努力の実際を学ぶことにより、哲学的思考法の基本を身につける。

2. キーワード

ポスト・ヒューマン 人間の条件 エンハンスメント ヒトゲノム

3. 到達目標

典型的な哲学的問題を素材に、さまざまな考え方を比較考量して、自ら思考し、判断する能力の基礎を作る。

4. 授業計画

- 第1回 トランス・ヒューマニズムとは何か
- 第2回 新しい人間?
- 第3回 人間の条件
- 第4回 クローン人間
- 第5回 再生医療
- 第6回 新しい優生学
- 第7回 デザイナー・ベビー
- 第8回 エンハンスメント
- 第9回 ポスト・ヒューマン
- 第10回 ヒトゲノム計画
- 第11回 人間を超えるAI
- 第12回 脳のモデル化
- 第13回 ニーチェの「超人」
- 第14回 まとめ
- 第15回 試験

5. 評価方法・基準

期末試験(約70%)および数回のノート提出(約30%)で評価する。

60点以上を合格とする。

6. 履修上の注意事項、授業時間外における学習等

以下の参考図書を、自宅学習に活用すること。

レイ・カーツワイル,『ポスト・ヒューマン誕生:コンピュータが人類の知性を超えるとき』(日本放送出版協会,2007)

本館 閲覧室3階 学生用図書 549.9ⅡK-583

7. 教科書・参考書

授業時に資料を配布。

8. オフィスアワー等

月曜日:15:00～16:00

哲学Ⅰ Philosophy Ⅰ（金曜2限）

全学科 第2、3年次 前期 選択必修 2単位

担当教員 中村 雅之

1. 概要

●授業の概要

地球温暖化論争

本講義は、2、3年生を対象とした中級講義である。環境問題を素材に、事実の検証方法、議論の仕方、論理的推論の方法、他人に伝わる日本語表現の方法を身につける。

●授業の目的

地球温暖化問題については、従来から根強くあった温暖化否定論が近年活発に論じられるようになった。各種温暖化否定論者の主張を検討し、不確実な問題についての合理的判断力を養う。

2. キーワード

地球温暖化、救命艇倫理、環境リスク、世代間倫理

3. 到達目標

環境問題はメディアなどを通じて、連日、多種多様な情報が流されているが、専門家によるものも含めて、そうした情報を鵜呑みにせず、丹念に検討する通じて、与えられた情報を吟味し自ら考える能力の獲得を、また自らの考えを他人に伝わる仕方 で表現する能力の獲得を目指す。

4. 授業計画

第1～2回 地球温暖化論

第3～5回 地球温暖化否定論

第6回 レポート検討Ⅰ

第7～8回 リサイクルの功罪

第9～11回 環境リスク論

第12回 レポート検討Ⅱ

第13回 世代間倫理

第14回 ディープ・エコロジー

第15回 救命艇倫理

5. 評価方法・基準

講義進行中に課せられる2回の小レポートと期末レポートの合計点で評価する。

小レポート各25%、期末レポート50%。

60点以上を合格とする。

6. 履修上の注意事項、授業時間外における学習等

小レポート、期末レポートは単位の必要要件なので、必ず提出すること。以下の参考図書を、自宅学習に活用すること。

武田邦彦著『偽善エコロジー：「環境生活」が地球を破壊する』（幻冬舎、2008）

本館 閲覧室3階 519ⅡT-3

7. 教科書・参考書

授業時に資料を配布。

8. オフィスアワー等

月曜日：15:00～16:00

哲学Ⅱ Philosophy Ⅱ（月曜1限）

全学科 第1、2年次 後期 選択必修 2単位

担当教員 中村 雅之

1. 概要

●授業の概要

脳・身体・ロボット

近年、人工知能研究やロボット工学の分野で、知能に関する新しいアプローチが提唱されている。それは、人間を環境内存在としてとらえ、脳・身体・環境を相互に作用し合う一体の存在者として、その知能を解明しようとするものである。じつは、このような考え方は身体哲学にその先駆がある。本講義では、身体哲学を背景にした新しい知能研究が、知能観、人間観にどのような変革をもたらすかを探る。

●授業の目的

哲学的な問題と解決への努力の実際を学ぶことにより、哲学的思考法の基本を身につける。

2. キーワード

脳、人工知能、身体性

3. 到達目標

典型的な哲学的問題を素材に、さまざまな考え方を比較考量して、自ら思考し、判断する能力の基礎を作る。

4. 授業計画

第1回 インテリジェンス・ダイナミクス

第2回 知能とは何か

第3回 AIの歴史

第4回 記号・情報処理モデルの限界

第5回 ニューラル・ネットワーク

第6回 力学系

第7回 ポランニーの暗黙知

第8回 メルロ＝ポンティの身体哲学

第9回 身体図式の獲得

第10回 環境内存在

第11回 身体性

第12回 発達の観点

第13回 共同注意

第14回 まとめ

第15回 試験

5. 評価方法・基準

期末試験（約70%）および数回のノート提出（約30%）で評価する。

60点以上を合格とする。

6. 履修上の注意事項、授業時間外における学習等

以下の参考図書を、自宅学習に活用すること。

土井利忠、藤田雅博、下村秀樹編『脳・身体性・ロボット：知能の創発をめざして』（シュプリンガー・フェアラーク東京、2005）

本館 閲覧室3階 549.9ⅡD-

7. 教科書・参考書

授業時に資料を配布。

8. オフィスアワー等

月曜日：15:00～16:00

哲学Ⅱ PhilosophyⅡ (月曜2限)

全学科 第1、2年次 後期 選択必修 2単位

担当教員 中村 雅之

1. 概要

●授業の概要

新しい優生学

優生学は、すでに克服された過去の学問だと思われがちであるが、生殖医療の発達とともに、「新しい優生学」の台頭が懸念されている。新しい優生学がもたらす功罪の両面を検討し、あるべき倫理の姿を探る。

●授業の目的

哲学的な問題と解決への努力の実際を学ぶことにより、哲学的思考法の基本を身につける。

2. キーワード

優生学、自己決定権、パーソン

3. 到達目標

典型的な哲学的問題を素材に、さまざまな考え方を比較考量して、自ら思考し、判断する能力の基礎を作る。

4. 授業計画

- 第1回 優生学とは何か
- 第2回 新しい優生学
- 第3回 デザイナー・ベビー
- 第4回 受精卵診断
- 第5回 遺伝子診断
- 第6回 パーソン論
- 第7回 幸福の追求権
- 第8回 自己決定権
- 第9回 自発的な優生学
- 第10回 優生学の歴史
- 第11回 日本の優生学
- 第12回 福祉国家と優生学
- 第13回 遺伝と環境
- 第14回 まとめ
- 第15回 試験

5. 評価方法・基準

期末試験(約70%)および数回のノート提出(約30%)で評価する。

60点以上を合格とする。

6. 履修上の注意事項、授業時間外における学習等

以下の参考図書を、自宅学習に活用すること。

米本昌平ほか 『優生学と人間社会：生命科学の世紀はどこへ向かうのか』(講談社, 2000)

本館 閲覧室1階 文庫 081ⅡK-3Ⅱ1511

7. 教科書・参考書

授業時に資料を配布。

8. オフィスアワー等

月曜日: 15:00 ~ 16:00

哲学Ⅱ PhilosophyⅡ (金曜2限)

全学科 第2、3年次 後期 選択必修 2単位

担当教員 中村 雅之

1. 概要

●授業の概要

生殖医療の倫理

本講義は、2、3年生を対象とした中級講義である。先端医療を巡る倫理問題の考察を通じて、考える力、論理的表現の力を養う。

●授業の目的

体外受精を前提にした生殖補助医療をめぐる問題のうち、代理出産、非配偶者間体外受精および受精卵診断を事例として取り上げる。これら先端医療が、従来の人間観、家族間に与える影響の理解を目指す。

2. キーワード

自己決定権、幸福の追求権、パーソン

3. 到達目標

事実の検証方法、議論の仕方、論理的推論の方法、他人に伝える日本語表現の方法を身につける。

4. 授業計画

- 第1回 代理母問題の歴史
- 第2～3回 日本の現状
- 第4回 諸外国の現状
- 第5回 非配偶者間体外受精
- 第6回 レポート検討Ⅰ
- 第7～8回 受精卵診断
- 第9～11回 「生命の選択」と新優生学
- 第12回 レポート検討Ⅱ
- 第13～15回 生命倫理学の問題

5. 評価方法・基準

講義進行中に課せられる2回の小レポートと期末レポートの合計点で評価する。

小レポート各25%、期末レポート50%。

60点以上を合格とする。

6. 履修上の注意事項、授業時間外における学習等

小レポート、期末レポートは単位の必須要件なので、必ず提出すること。以下の参考図書を、自宅学習に活用すること。

奈良信雄 『遺伝子診断で何ができるか：出生前診断から犯罪捜査まで』(講談社, 1998)

本館 閲覧室1階 文庫 408ⅡB-2Ⅱ1222

7. 教科書・参考書

授業時に資料を配布。

8. オフィスアワー等

月曜日: 15:00 ~ 16:00

倫理学Ⅰ EthicsⅠ（月曜1限）

全学科 第1、2年次 前期 選択必修 2単位

担当教員 堺 正憲

1. 概要

●授業の背景

現代の目覚ましい科学技術の発達と人間の活動に伴って、環境問題などわれわれ人類の生存に関わる全地球的問題が生じている。このような現代の状況において、古来、哲学や倫理学が問題として探求して来た「人間として知るべき知恵」の重要性を再認識するとともに、この「知恵」によって科学技術的知識と人間の活動とをコントロールする必要性が生じている。また、人間生活が目指すべき目標についても再考する必要性が生じている。

●授業の目的

本授業は、われわれが人生をよく生きるために、世界とこの世界の中の人間（自己）の在り方について深く考えるための材料を提供することを目的とする。

●授業の位置付け

倫理学を、世界観と人生観の学としての哲学の一部門と位置付け、人間の在り方をめぐる問題を、社会や自然との関連とともに、超越者との関連をも視野に入れながら哲学的に考察する。（関連する学習教育目標：われわれが持つ「知」には種類と段階とがあることを理解する。）

2. キーワード

アウグスティヌス、キリスト教、告白、受洗、モニカ

3. 到達目標

アウグスティヌス著『告白録』に基づいて、超越的神との関係において人間をとらえる宗教的人間観を理解する。本授業では、まず、哲学と倫理学との関係、哲学とキリスト教との関係を考察し、次いで、『告白録』第1巻に基づいてキリスト教の世界観・人間観を概観してから、『告白録』第1巻から第8巻までの要旨を概観し、さらに、第9巻に基づいてアウグスティヌスが32歳の時に回心してから翌年受洗するまでの時期の生活と母モニカの死について考察する。

4. 授業計画

- 第1回 哲学と倫理学（1）
- 第2回 哲学と倫理学（2）
- 第3回 哲学とキリスト教（1）
- 第4回 哲学とキリスト教（2）
- 第5回 告白と讃美
- 第6回 神と被造物
- 第7回 人間の罪
- 第8回 神の三位一体と御言の受肉
- 第9回 キリストによる救い
- 第11回 『告白録』第1巻から第8巻までの要旨（1）
- 第11回 『告白録』第1巻から第8巻までの要旨（2）
- 第12回 第9巻—カシヤクムでの生活
- 第13回 第9巻—受洗
- 第14回 第9巻—母モニカの死
- 第15回 試験

5. 評価方法・基準

期末試験（100％）で評価する。
60点以上を合格とする。

6. 履修上の注意事項、授業時間外における学習等

授業には、忍耐強く継続して出席して下さい。

7. 教科書・参考書

●教科書

特に指定しない。

●参考書

授業の中で必要に応じて指示する。

8. オフィスアワー等

質問は、授業中あるいは授業後に随時直接受け付ける。なお、その他連絡したいことがある場合は、下記の電子メール・アドレスで受け付ける。

(E-mail : m - sakai@pastel.ocn.ne.jp)

倫理学Ⅰ EthicsⅠ（金曜2限）

全学科 第2、3年次 前期 選択必修 2単位

担当教員 堺 正憲

1. 概要

●授業の背景

現代の目覚ましい科学技術の発達と人間の活動に伴って、環境問題などわれわれ人類の生存に関わる全地球的問題が生じている。このような現代の状況において、古来、哲学や倫理学が問題として探求して来た「人間として知るべき知恵」の重要性を再認識するとともに、この「知恵」によって科学技術的知識と人間の活動とをコントロールする必要性が生じている。また、人間生活が目指すべき目標についても再考する必要性が生じている。

●授業の目的

本授業は、われわれが人生をよく生きるために、世界とこの世界の中の人間（自己）の在り方について深く考えるための材料を提供することを目的とする。

●授業の位置付け

倫理学を、世界観と人生観の学としての哲学の一部門と位置付け、人間の在り方をめぐる問題を、国家・社会や自然との関連も視野に入れて哲学的に考察する。（関連する学習教育目標：われわれが持つ「知」には種類と段階とがあることを理解する。）

2. キーワード

アリストテレス、政治学、国制、

3. 到達目標

アリストテレスの『ニコマコス倫理学』と呼ばれる著作と『政治学』と呼ばれる著作とは、それぞれアリストテレスの一つの「政治学」の第1部と第2部に当たる著作であるとする観点から、『政治学』と呼ばれる著作を通して、国家・社会的存在としての人間の在り方について考える。本授業では、アリストテレス著『政治学』第1巻から第3巻までの内容を概観した上で、第4巻に基づいて、現実の諸国制、大多数の国々にとっての最善の国制、国制の組織の問題を考察し、内容を理解する。

4. 授業計画

- 第1回 倫理学と哲学（1）
- 第2回 倫理学と哲学（2）
- 第3回 『政治学』第1巻の要点
- 第4回 『政治学』第2巻の要点
- 第5回 『政治学』第3巻の要点
- 第6回 『政治学』第4巻について
- 第7回 現実の諸国制（1）
- 第8回 現実の諸国制（2）
- 第9回 現実の諸国制（3）
- 第10回 現実的な最善の国制（1）
- 第11回 現実的な最善の国制（2）
- 第12回 国制の三つの部分—（1）評議的部分
- 第13回 国制の三つの部分—（2）諸役の部分
- 第14回 国制の三つの部分—（3）裁判をする部分
- 第15回 試験

5. 評価方法・基準

期末試験（100％）で評価する。
60点以上を合格とする。

6. 履修上の注意事項、授業時間外における学習等

授業には、忍耐強く継続して出席して下さい。

7. 教科書・参考書

●教科書

アリストテレス / 山本光雄訳『政治学』（岩波文庫）081/
I-1/6319-6322

●参考書

授業の中で必要に応じて指示する。

8. オフィスアワー等

質問は、授業中あるいは授業後に随時直接受け付ける。なお、その他連絡したいことがある場合は、下記の電子メール・アドレスで受け付ける。

(E-mail : m - sakai@pastel.ocn.ne.jp)

倫理学Ⅱ EthicsⅡ（月曜1限）

全学科 第1、2年次 後期 選択必修 2単位

担当教員 堺 正憲

1. 概要

●授業の背景

現代の目覚ましい科学技術の発達と人間の活動に伴って、環境問題などわれわれ人類の生存に関わる全地球的問題が生じている。このような現代の状況において、古来、哲学や倫理学が問題として探求して来た「人間として知るべき知恵」の重要性を再認識するとともに、この「知恵」によって科学技術的知識と人間の活動とをコントロールする必要性が生じている。また、人間生活が目指すべき目標についても再考する必要性が生じている。

●授業の目的

本授業は、われわれが人生をよく生きるために、世界とこの世界の中の人間（自己）の在り方について深く考えるための材料を提供することを目的とする。

●授業の位置付け

倫理学を、世界観と人生観の学としての哲学の一部門と位置付け、人間の在り方をめぐる問題を、社会や自然との関連とともに、超越者との関連をも視野に入れながら哲学的に考察する。（関連する学習教育目標：われわれが持つ「知」には種類と段階とがあることを理解する。）

2. キーワード

アウグスティヌス、キリスト教、告白、記憶、至福の生、真理、肉の欲、目の欲、世間的野心

3. 到達目標

アウグスティヌス著『告白録』に基づいて、超越的神との関係において人間をとらえる宗教的人間観を理解する。本授業では、先ず、哲学と倫理学との関係、哲学とキリスト教との関係を概観し、次いで、『告白録』第1巻に基づいてキリスト教の世界観・人間観を概観してから、『告白録』第10巻に基づいてアウグスティヌスの現在の自己についての告白を考察する。

4. 授業計画

- 第1巻 哲学と倫理学
- 第2回 哲学とキリスト教
- 第3回 告白と讃美
- 第4回 神と被造物
- 第5回 人間の罪
- 第6回 神の三位一体と御言の受肉
- 第7回 キリストによる救い
- 第8回 過去の自己についての告白の意味
- 第9回 現在の自己についての告白の意味
- 第10回 記憶（1）
- 第11回 記憶（2）
- 第12回 至福の生と真理
- 第13回 肉の欲、目の欲、世間的野心
- 第14回 仲保者キリスト
- 第15回 試験

5. 評価方法・基準

期末試験（100％）で評価する。

60点以上を合格とする。

6. 履修上の注意事項、授業時間外における学習等

授業には、忍耐強く継続して出席して下さい。

7. 教科書・参考書

●教科書

特に指定しない。

●参考書

授業の中で必要に応じて指示する。

8. オフィスアワー等

質問は、授業中あるいは授業後に随時直接受け付ける。なお、その他連絡したいことがある場合は、下記の電子メール・アドレスで受け付ける。

(E-mail : m - sakai@pastel.ocn.ne.jp)

倫理学Ⅱ EthicsⅡ（金曜2限）

全学科 第2、3年次 後期 選択必修 2単位

担当教員 堺 正憲

1. 概要

●授業の背景

現代の目覚ましい科学技術の発達と人間の活動に伴って、環境問題などわれわれ人類の生存に関わる全地球的問題が生じている。このような現代の状況において、古来、哲学や倫理学が問題として探求して来た「人間として知るべき知恵」の重要性を再認識するとともに、この「知恵」によって科学技術的知識と人間の活動とをコントロールする必要性が生じている。また、人間生活が目指すべき目標についても再考する必要性が生じている。

●授業の目的

本授業は、われわれが人生をよく生きるために、世界とこの世界の中の人間（自己）の在り方について深く考えるための材料を提供することを目的とする。

●授業の位置付け

倫理学を、世界観と人生観の学としての哲学の一部門と位置付け、人間の在り方をめぐる問題を、国家・社会や自然との関連も視野に入れて哲学的に考察する。

（関連する学習教育目標：われわれが持つ「知」には種類と段階とがあることを理解する。）

2. キーワード

アリストテレス、政治学、国制変革

3. 到達目標

アリストテレスの『ニコマコス倫理学』と呼ばれる著作と『政治学』と呼ばれる著作とは、それぞれアリストテレスの一つの「政治学」の第1部と第2部に当たる著作であるとする観点から、『政治学』と呼ばれる著作を通して、国家・社会的存在としての人間の在り方について考察する。本授業では、アリストテレス著『政治学』の第1巻から第4巻までの内容を概観した上で、第5巻に基づいて国制変革の問題について考察し、内容を理解する。

4. 授業計画

- 第1回 倫理学と哲学（1）
- 第2回 倫理学と哲学（2）
- 第3回 『政治学』第1巻の要点
- 第4回 『政治学』第2巻の要点
- 第5回 『政治学』第3巻の要点
- 第6回 『政治学』第4巻の要点
- 第7回 『政治学』第5巻について
- 第8回 国制変革とその一般的原因（1）
- 第9回 国制変革とその一般的原因（2）
- 第10回 国制変革とその一般的原因（3）
- 第11回 国制変革の特殊原因とその回避手段（1）
- 第12回 国制変革の特殊原因とその回避手段（2）
- 第13回 国制変革の特殊原因とその回避手段（3）
- 第14回 国制変革の特殊原因とその回避手段（4）
- 第15回 試験

5. 評価方法・基準

期末試験（100％）で評価する。

60点以上を合格とする。

6. 履修上の注意事項、授業時間外における学習等

授業には、忍耐強く継続して出席して下さい。

7. 教科書・参考書

●教科書

アリストテレス / 山本光雄訳『政治学』（岩波文庫）081 / I-1/6319-6322

●参考書

授業の中で必要に応じて指示する。

8. オフィスアワー等

質問は、授業中あるいは授業後に随時直接受け付ける。なお、その他連絡したいことがある場合は、下記の電子メール・アドレスで受け付ける。

(E-mail : m - sakai@pastel.ocn.ne.jp)

歴史学 I

History I, the 1st and the 2nd period, Monday (月曜1・2限)

全学科 第1、2年次 前期 選択必修 2単位

担当教員 水井 万里子

1. 概要

●授業の背景

ヨーロッパの人々が未知の世界に航海し、次々と新しい世界を発見し世界の一体化と世界的な市場の成立が促されたというイメージが「大航海時代」(15世紀末から18世紀)という概念にあてはまる。しかし、最近の歴史学の研究は、この時代に既にアジアやイスラム圏に優れた航海技術が確立され、豊かな地域交易圏が広がっていたことを明らかにしている。大航海時代初めの頃のヨーロッパはそれらを「発見・征服」したのではなく、むしろそれらに「参入」していったのである。授業ではこのような歴史学の新しい視点を取り入れて西洋と東洋の出会いについて考える。

●授業の目的

15世紀末から18世紀を対象時期として、モノの流通に焦点をあてる。交易の成立、国際商業に携わるヒトにも着目し、さまざまな歴史背景を理解した上で具体的なモノ(茶)の歴史と結びつける。広域エリアの人や文化の交流について考えを深める。この当時の歴史が現代の様々な問題につながっていることを理解する。

●授業の位置づけ

中国原産の茶が、インド洋沿岸、アラビア半島、地中海、ヨーロッパへと地球的な規模で流通していった、近世から近代にかけての歴史を追う。茶というモノの流れを時間軸に沿って理解していき、地球規模の流通や食文化、交易ネットワークの成立について考えていく。これらが植民地の形成と大きく関り、その結果現代まで続く経済的な問題を生み出したことを認識する。

2. キーワード

「交易史」「社会史」「モノの歴史学」「茶」

3. 到達目標

- ①歴史学の考え方を理解する。歴史＝暗記というイメージを変える。時間軸とエリアの組み合わせで、過去から現在までの物事の変化の様子を検討する。(30%)
- ②マクロ・ミクロ史を理解する。茶の流通・伝播を通じてグローバルな視野で中世から近世の世界の歴史を理解する。(40%)
- ③日本語による歴史記述を習得する。時間軸、エリア、5W1Hが入った簡潔で明確な文章を記述する。論理的に証拠をあげて自分の考えを示す。時間をかけたレポート作成とともに、テスト形式で時間内に一定量の歴史記述を行う。(30%)

4. 授業計画

- ①ガイダンス
- ②大航海時代とは?・個別事例:スパイス
- ③理論・個別事例:茶
- ④大航海時代:1ポルトガル・スペイン
- ⑤スパイスと北西ヨーロッパ
- ⑥大航海時代:2中核国の推移
- ⑦大航海時代:3オランダ・イギリスの勃興
- ⑧ヨーロッパ各国の東インド会社①
- ⑨ヨーロッパ各国の東インド会社②
- ⑩紅茶・コーヒー・砂糖
- ⑪イギリスの紅茶文化
- ⑫大量消費と植民地生産
- ⑬帝国の揺らぎ
- ⑭植民地:過去・現在
- ⑮期末試験

5. 評価方法・基準

授業は講義形式で行う。視聴覚資料、配布資料を用いて補足説明する。小テスト、期末テストの前にはキーワードをあげて説明する。小テスト後に履修者例等集を用いた解説を行い、内容、論述形式のテストについて技術的な説明を行う。またレポートでは指定されたテーマについて調査・分析し表現する力を評価する。

●成績評価

小テスト	20%
レポート	20%
期末テスト	60%

60%以上を合格とする。

6. 履修上の注意、授業時間外における学習等

第一回目の授業で注意点を述べる。

なお、授業外学習としてVOD:『サイモン・シャーマの英国史 英語(日本語字幕版)』

11、14『素晴らしい列車の旅 バイリンガル版1(インド東から西へ)』の視聴を勧める。

7. 参考文献

角山栄『茶の世界史』中公新書、1998年。08111C-111596

8. オフィスアワー

研究室扉脇のオフィスアワー掲示を参照のこと。

Mon1kit@aol.com 1限

Mon2kit@aol.com 2限

歴史学Ⅰ History I, the 2nd period, Friday (金曜2限)

全学科 第2、3年次 前期 選択必修 2単位

担当教員 水井 万里子

1. 概要

●授業の背景

現代日本に暮らす私たちは「資源」「開発」というキーワードに対してどのようなイメージを描くだろうか。資源を保有する地域が豊かであると考えるのが一般的なのかもしれない。しかし、世界には資源を保有しているにもかかわらず、その恩恵が人々に十分にいきわたらず、社会に大きな格差が生まれている地域も多い。ヨーロッパ諸国やアメリカが世界の資源開発に着手した大航海時代から19世紀の植民地時代までを通観することで、資源開発に関わる人・国家・物・私企業の関係性の変遷が見えてくる。

●授業の目的

17世紀から19世紀を対象時期として、歴史上の資源開発に焦点をあてる。資源とは何か、資源の所有権、資源開発のプロセス、資源の開発、生産、流通に関する人々の役割、資源開発にともなう諸問題（環境・グローバル化・貧富格差等）について事例を交えて学び歴史的な理解を深める。

●授業の位置づけ

「資源」や「開発」はヨーロッパやアメリカの経済の歴史を理解する上で、重要なキーワードである。しかし、現代の大規模鉱山は中東、アフリカやラテン・アメリカなど、西洋諸国とは異なるエリアに存在するものが多い。日本でもほんの数十年前まで石炭を中心とする大規模鉱山が各地に存在したが、今や産業遺跡としてのみ形をとどめているものも少なくない。授業ではまず、西洋や植民地における資源の種類（金属・化石燃料等）について個別に学ぶ。また鉱業技術の発達や鉱夫の労働・コミュニティのあり方を理解し、鉱山社会（ヤマ社会）について検討する。資源と開発という現代的な問題をその起源から洗いだしていく。

2. キーワード

「資源」「開発」「技術」「グローバル化」「西洋」「植民地」

3. 到達目標

- ①歴史学の考え方を理解する。歴史＝暗記というイメージを変える。時間軸とエリアの組み合わせで、過去から現在までの物事の変化の様子を検討する。(30%)
- ②資源・開発という現代社会のキーワードから過去を読み解く。様々な資源開発の歴史事例を学び、当時の人々の暮らしや価値観などを考慮して現代との違い・共通点を読み解く。(40%)
- ③日本語による歴史記述を習得する。時間軸、エリア、5W1Hが入った簡潔で明確な文章を記述する。証拠を示しながら論理的に自分の考えを表現する。時間をかけたレポート作成とともに、テスト形式で時間内に一定量の歴史記述を行う。(30%)

4. 授業計画

- ①ガイダンス
- ②歴史学方法論
- ③資源と歴史
- ④植民地と開発
- ⑤個別事例 金属1 開発
- ⑥ 2 生産
- ⑦ 3 流通
- ⑧小テスト
- ⑨個別事例 石炭1 開発
- ⑩ 2 生産
- ⑪ 3 流通
- ⑫個別都市事例 ゴム1 開発
- ⑬ 2 生産
- ⑭ 3 流通
- ⑮期末試験

5. 成績評価・基準

- | | |
|-------|-----|
| レポート① | 20% |
| レポート② | 30% |

期末テスト 50%

60%以上を合格とする。

6. 履修上の注意事項、授業時間外における学習等

第一回目の授業で注意点を述べる。

なお、授業外学習としてVOD:『サイモン・シャーマの英国史 英語(日本語字幕版) 11、14』『素晴らしい列車の旅 バイリンガル版4 (東南アジア豪華な気分で)』の視聴を勧める。

7. 参考文献

山口梅太郎『放送大学印刷教材 140(現代資源論: 鉱物資源とその開発)』1986年。375.9\\H-2\\140

8. オフィスアワー

研究室扉脇のオフィスアワー掲示を参照のこと。

Mizuikit@aol.com

歴史学Ⅱ

History AⅡ, the 1st and 2nd period, Monday (月曜1・2限)

全学科 第1、2年次 後期 選択必修 2単位

担当教員 水井 万里子

1. 概要

●授業の背景

電気や水道、ガスもない時代(近世・近代)に、イギリスの都市に暮らす人々の生活はどのようなものだったのか。当時の人々は何を食べて、何を楽しみにして何を恐れながら暮らしていたのだろうか。この時代のイギリスには、「宗教改革」や「革命」など年表に記されるような大事件が起こっているが、年表にあらわることのない当時の普通の人々の暮らしと、このような大事件はどのように交わっていたのか。18世紀末から19世紀にかけてロンドン市は世界で最も早く工業化、都市化を経験し、この時期に起こった大きな変化は現代社会と共通の問題点を数多く生み出した。このような長期に渡る変化の過程を追いつつ、現代社会の諸問題の起源を探る。

●授業の目的

16世紀から19世紀を対象時期として、イギリス史上の都市に焦点をあてる。都市の成立プロセス、都市の生活と社会など、歴史上のさまざまな都市の事例を見ていく。それらの事例から、歴史学の重要な考え方である社会史の考え方を学び、ヨーロッパ社会の歴史を理解していく。

●授業の位置づけ

「都市」や「市民」の概念はヨーロッパの社会を理解する上で、重要なキーワードである。これらが西洋で成立した過程を詳しくたどることで、「市民として都市でくらす」ことの歴史的な変化を把握する。また、個別事例としてロンドンを中心にみていく。地球の裏側であるヨーロッパの過去の都市に生きた人々について、生活、レクリエーション、信仰、職業・福祉など幅広い視点で考える。

2. キーワード

「都市史」「社会史」「文化史」「近世近代」「イギリス」「ロンドン」

3. 到達目標

- ①歴史学の考え方を理解する。歴史＝暗記というイメージを変える。時間軸とエリアの組み合わせで、過去から現在までの物事の変化の様子を検討する。(30%)
- ②都市という現代社会のキーワードから過去を読み解く。様々な都市の歴史事例を学び、当時の都市に生きた人々の日常を理解する。(40%)
- ③日本語による歴史記述を習得する。時間軸、エリア、5W1Hが入った簡潔で明確な文章を記述する。論理的に証拠をあげながら自分の考えを示す。時間内に一定量の歴史に関する文章を記述する。また、レポートの基本的な書き方を学ぶ。(30%)

4. 授業計画

- ①ガイダンス
- ②歴史学方法論
- ③西洋中世都市モデル
- ④都市の人口規模比較
- ⑤個別事例 1 成立過程
- ⑥ 2 都市社会構造
- ⑦ 3 社会分極化
- ⑧ 小テスト
- ⑨ 4 都市文化
- ⑩ 5 新興都市
- ⑪ 6 都市化・工業化
- ⑫ 7 貧困と福祉
- ⑬ 8 植民地と都市
- ⑭ 9 都市と外国人
- ⑮期末試験

5. 評価方法・基準

授業は講義形式で行う。視聴覚資料、配布資料を用いて補足説

明する。小テスト、期末テストの前にはキーワードをあげて説明する。小テスト後に履修者例等集を用いた解説を行い、内容、論述形式のテストについて技術的な説明を行う。またレポートでは指定されたテーマについて調査・分析し表現する力を評価する。

●成績評価

小テスト	20%	2問(各10点)
レポート	20%	
期末テスト	60%	3問(25点2問、30点1問)

6. 履修上の注意、授業時間外における学習等

第一回の授業で注意点を述べる。

なお、授業外学習としてVOD:『サイモン・シャーマの英国史 英語(日本語字幕版) 7、8、11、14』(図書館HP参照)の視聴を勧める。

7. 参考文献

イギリス都市・農村共同体研究会編『巨大都市ロンドンの勃興』刀水書房、1999年。233.3Ⅱ-1Ⅱb

8. オフィスアワー

研究室扉脇のオフィスアワー掲示を参照のこと。

Mon2kit@aol.com

歴史学Ⅱ HistoryⅡ (金曜2限)

全学科 第2、3年次 後期 選択必修 2単位

担当教員 水井 万里子

1. 概要

●授業の背景

現在日本に暮らす私たちは、異なる出自や文化をもって同じ社会に人々が暮らしているという意識を持っているだろうか。特に現代都市には、異なる国籍、異なる宗教、異なる民族性、異なる文化、を持つ人々が住んでいて、共生が進むとともに、周縁に追いやられる人々が出てくるなど、様々な問題が生じてきている。ヨーロッパを中心に歴史上の都市の多文化共生の事例をとりあげること、近現代的な都市に共通する諸問題が見えてくる。

●授業の目的

16世紀から19世紀を対象時期として、歴史上の都市、特に都市における多文化共生の問題に焦点をあてる。それらについての事例を個別に学んだ上で、ヨーロッパ社会の歴史的な理解を深め、現代日本の多文化共生をめぐる諸問題についても考える。

●授業の位置づけ

「外国人」や「マイノリティ」の概念はヨーロッパの社会を理解する上で、重要なキーワードである。授業ではまず、これらについてのヨーロッパにおける事例を詳しく紹介する。現代日本の我々が持つ多文化のイメージがいつ頃、どのように起こり、展開してきたのかを理解する。「多文化共生」をキーワードとする社会の問題を歴史的に、また多角的に捉えることができるようにする。

2. キーワード

「多文化」「ヨーロッパ」「周縁」

3. 到達目標

- ①歴史学の考え方を理解する。歴史＝暗記というイメージを変える。時間軸とエリアの組み合わせで、過去から現在までの物事の変化の様子を検討する。(30%)
- ②多文化という現代社会のキーワードから過去を読み解く。様々な多文化共生の歴史事例を学び、それぞれ時代に生きた当時の人々の暮らしや価値観などを考察する。それらを検討し、共通点と相違点を明らかにする。(40%)
- ③日本語による歴史記述を習得する。時間軸、エリア、5W1Hが入った簡潔で明確な文章を記述する。証拠を示しながら論理的に自分の考えを表現する。時間をかけたレポート作成とともに、テスト形式で時間内に一定量の歴史記述を行う。(30%)

4. 授業計画

①ガイダンス

②歴史学方法論

③ヨーロッパにおける多文化とは

④

⑤地域的周縁

1 民族

⑥

2 少数言語

⑦

3 ディアスポラ

⑧

小テスト

⑨社会の周縁

1 貧富の格差

⑩

2 周縁(宗教・民族)

⑪

3 周縁(福祉)

⑫グローバル化

1 植民地とヨーロッパ

⑬

2 南北格差

⑭

3 共生の21世紀

⑮期末試験

5. 評価方法・基準

授業は講義形式で行う。視聴覚資料、配布資料を用いて補足説明する。期末テストの前にはキーワードをあげて説明する。レポートは学期半ばと授業終了時に計2本提出する。

●成績評価

レポート① 20%

レポート② 30%

期末テスト

50%

60%以上を合格とする。

6. 履修上の注意、授業時間外における学習等

第一回目の授業で注意点を述べる。

なお、授業外学習としてVOD:『サイモン・シャーマの英国史 英語(日本語字幕版)11、14』(図書館HP参照)の視聴を勧める。

7. 参考文献

川北稔・指昭博編『周縁からのまなざし』山川出版社、2000年。
233ⅡK-6Ⅱa

8. オフィスアワー

研究室扉脇のオフィスアワー掲示を参照のこと。

Mizuikit@aol.com

文学Ⅰ LiteratureⅠ（月曜2限）

全学科 第1、2年次 前期 選択必修 2単位

担当教員 石井 和夫

1. 概要

●授業の背景

日本の近代を明治大正昭和期の作家がどうとらえたか、それは現代においてどういう意味を持つか、描かれた「都市」に焦点を当ててアプローチする。

●授業の目的

文章を読むための技術について理解を促す。反覆表現が作家の意識・無意識の読者に向けたサインになっている点を手がかりにする。

●授業の位置付け

文学は工学とジャンルは異なるけれども、独創を求めることが重要である点は変わらない。作品の読解が文章表現で行われる限りそれは一種の創作であり、そこに独創的な読みを導くアイデアが必要になる。発想・着想という広い視野から授業を位置づけたい。（関連する学習教育目標：X）

2. キーワード

読解 独創 社会

3. 到達目標

通説にとらわれず自分自身の読解を提示できるようにすること。

4. 授業計画

- 第1回 反覆表現読解の実例1（講義ガイダンス）
- 第2回 反覆表現読解の実例2
- 第3回 泉鏡花「夜行巡査」
- 第4回 樋口一葉「十三夜」
- 第5回 田山花袋「少女病」
- 第6回 国木田独步「窮死」
- 第7回 中間試験（作文）
- 第8回 谷崎潤一郎「秘密」
- 第9回 志賀直哉「小僧の神様」
- 第10回 芥川龍之介「舞踏会」
- 第11回 梶井基次郎「檸檬」横光利一「街の底」
- 第12回 中野重治「交番前」堀辰雄「水族館」
- 第13回 江戸川乱歩「目羅博士」織田作之助「木の都」
- 第14回 三島由紀夫「橋づくし」大江健三郎「人間の羊」
- 第15回 筆記試験（期末試験）

5. 評価方法・基準

出席点（10点） 中間試験（作文 800字）（10点）
 期末試験（作文 800字）（80点）
 60点以上を合格とする。

6. 履修上の注意事項、授業時間外における学習等

出席重視（3分の2以上出席しなければ期末試験は受けられない）。

7. 教科書・参考書

●教科書

東郷克美・吉田司雄編『近代小説「都市」を読む』（双文社出版 2100円）913.6/T-187/2

●参考書

ガイダンス、および講義中にその都度指示する。

8. オフィスアワー等

文学Ⅰ LiteratureⅠ（金曜2限）

全学科 第2、3年次 前期 選択必修 2単位

担当教員 荻原 桂子

1. 概要

●授業の背景

活字離れが危惧される現代において、学生の読書力の低下が危惧されている。

●授業の目的

文学作品を深く読むことによって、学生の読書力と生きる力を高める。読書には、自分をつくるという働きのほかに、自分の魂に共鳴する他者を自分のなかにもつという働きもある。読書を通じて、自分を客観的にみるという視点がうまれるのである。自分の主観から少し離れて、別の視点から自分を見てみるという客観的な視点をもつことができるようになる。自分の主観とは独立した他者の意見に接することで、自分に距離をもって接することができるようになる。こうした行為の経過が、焦げ付いた状況から自分を解放してくれる。授業では、「文学」と題して、考えながら読む古典読みに焦点をあわせ、文学作品を読んでみることにする。ここでいう古典とは、時間や空間の変遷にも色褪せず、作品の魅力を発揮するものである。

●授業の位置付け

12回に分けて文学作品を輪読し、文学作品の読解力をつけ、作品に描かれたものごとの理解力を深め、さらに文章表現力の向上を目指す。

2. キーワード

日本近代文学・夏目漱石

3. 到達目標

文学に興味を持ち、文学作品を読むことで、読書力をつける。

4. 授業計画

- 第1回 授業の説明。現代文学の紹介をとおして文学とはどのようなものかを考える。
- 第2回 樋口一葉『たけくらべ』
- 第3回 泉鏡花『高野聖』
- 第4回 島崎藤村『破戒』
- 第5回 夏目漱石『こころ』
- 第6回 森鷗外『高瀬舟』
- 第7回 芥川龍之介『奉教人の死』
- 第8回 宮沢賢治『よだかの星』
- 第9回 谷崎潤一郎『春琴抄』
- 第10回 川端康成『雪国』
- 第11回 太宰治『人間失格』
- 第12回 三島由紀夫『仮面の告白』
- 第13回 遠藤周作『海と毒薬』
- 第14回 試験の説明。まとめ。
- 第15回 試験

5. 評価方法・基準

期末試験（80%）および授業への出席状況（20%）で評価する。60点以上を合格とする。

6. 履修上の注意事項、授業時間外における学習等

毎回出席を取るなので、遅れずに着席すること。教科書で取り上げる作品は抜粋なので、授業後、各自で作品全体をなるべく読むこと。

7. 教科書・参考書

●教科書

『文学を読む』花書院

●参考書

授業中に紹介する。

8. オフィスアワー等

九州女子大学人間科学部荻原研究室（ogihara@kwuc.ac.jp）

文学Ⅱ LiteratureⅡ (月曜2限)

全学科 第1、2年次 後期 選択必修 2単位

担当教員 石井 和夫

1. 概要

●授業の背景

日本の近代を明治大正昭和期の作家がどうとらえたか、それは現代においてどういう意味を持つかという問題にアプローチする。

●授業の目的

異界という概念を軸に人間の想像力の持つ意味をとらえる。

●授業の位置付け

文学は工学とジャンルは異なるけれども、独創を求めることが重要である点は変わらない。作品の読解が文章表現で行われる限りそれは一種の創作であり、そこに独創的な読みを導くアイデアが必要になる。発想・着想という広い視野から授業を位置づけたい。(関連する学習教育目標：X)

2. キーワード

異界 想像力 臨界点

3. 到達目標

通説にとらわれず自分自身の読解を提示できるようにすること。

4. 授業計画

第1回 反覆表現読解の実例1(講義ガイダンス)(印刷資料を用いて作品読解の方法にふれる。)

第2回 反覆表現読解の実例2

第3回 泉鏡花「龍潭譚」

第4回 永井荷風「狐」

第5回 佐藤春夫「西班牙犬の家」

第6回 谷崎潤一郎「母を恋ふる記」

第7回 中間試験

第8回 芥川龍之介「奉教人の死」

第9回 江戸川乱歩「押絵と旅する男」夢野久作「瓶詰の地獄」

第10回 梶井基次郎「Kの昇天」萩原朔太郎「猫町」

第11回 中島敦「狐憑」井伏鱒二「へんろう宿」

第12回 太宰治「魚服記」岡本かの子「川」

第13回 川端康成「水月」

第14回 井上靖「補陀落渡海記」

第15回 筆記試験(期末試験)

5. 評価方法・基準

出席点(10点) 中間試験(作文 800字)(10点)

期末試験(作文 800字)(80点)

60点以上を合格とする。

6. 履修上の注意事項、授業時間外における学習等

出席重視(3分の2以上出席しなければ期末試験は受けられない)。

7. 教科書・参考書

●教科書

東郷克美・高橋広綱編『近代小説[異界]を読む』(双文社出版 2000円) 913.6/T

●参考書

1) トドロフ『幻想文学』(ちくま学芸文庫) 904/T-5

2) サルトル『想像力の問題』(人文書院) 958/S-1/12-b

8. オフィスアワー等

文学Ⅱ LiteratureⅡ (金曜2限)

全学科 第2、3年次 後期 選択必修 2単位

担当教員 荻原 桂子

1. 概要

●授業の背景

活字離れが危惧される現代において、学生の読書力の低下が危惧されている。

●授業の目的

文学作品を深く読むことによって、学生の読書力と生きる力を高める。

●授業の位置付け

毎回、漱石の作品を輪読し、文学作品の理解力をつけ、さらに文章表現力の向上を目指す。

2. キーワード

日本文学・夏目漱石

3. 到達目標

文学に興味を持ち、文学作品を読むことで、読書力をつける。漱石文学を理解する。

4. 授業計画

第1回 授業の説明。文学とはどのようなものか。漱石とはどのような作家か。

第2回 『吾輩は猫である』について

第3回 漱石文学におけるロンドン『趣味の遺伝』について

第4回 『坊っちゃん』について

第5回 『草枕』『二百十日』『野分』について

第6回 『虞美人草』について

第7回 『坑夫』『夢十夜』について

第8回 『三四郎』について

第9回 『それから』について

第10回 『門』について

第11回 『彼岸過迄』について

第12回 『行人』について

第13回 『心』について

第14回 試験の説明。まとめ。

第15回 試験

5. 評価方法・基準

期末試験(80%)および授業への出席状況(20%)で評価する。60点以上を合格とする。

6. 履修上の注意事項、授業時間外における学習等

毎回出席を取るなので、遅れずに着席すること。授業で紹介した文学作品をなるべくたくさん読むこと。

7. 教科書・参考書

●教科書

『増補 夏目漱石の作品研究』花書院 910.2/O-32/2

●参考書

授業中に紹介する。

8. オフィスアワー等

九州女子大学荻原研究室(ogihara@kwuc.ac.jp)

心理学Ⅰ Psychology I (金曜 2 限)

全学科 第2、3 年次 前期 選択必修 2 単位

担当教員 麦島 剛

1. 概要

●授業の概要

心理学はこころの法則性についての実証的な学術である。その研究対象は多岐に及び、各々にふさわしい研究方法がある。このため、心理学は大きく二分される。一つは、実験研究によって実証する分野であり、知覚・認知・記憶・学習などが扱われる。もう一つは、調査や面接などによって実証する分野であり、教育・人間関係・産業社会・こころの不調などが扱われる。この授業では、前者の領域、つまり実験心理学について概説する。

●授業の目的

実験心理学の諸分野について満遍なく概観し、そのエッセンスを理解し、総合的な人間理解の一角を築くことを目的とする。

2. キーワード

実験心理学・知覚・認知・記憶・学習・生理心理学

3. 到達目標

実験心理学全般に対する知識（理論と現象の両面）を身に着けること。

4. 授業計画

- 第1回 オリエンテーション・こころのサイエンスとは？
- 第2回 心理学史
- 第3回 生理心理学1 神経系の構造と機能（1）
- 第4回 生理心理学2 神経系の構造と機能（2）
- 第5回 生理心理学3 神経系と意識・情動・記憶・思考との関係
- 第6回 ストレス理論1 生理学的ストレス理論
- 第7回 ストレス理論2 心理学的ストレス理論とストレスコーピング
- 第8回 知覚心理学1 視覚系の知覚 内的世界と外的世界は同一なのか？
- 第9回 知覚心理学2 聴覚系の知覚 音の精神物理学
- 第10回 認知心理学1 注意とその障害
- 第11回 認知心理学2 記憶とその障害
- 第12回 学習心理学1 学習の2つのプロセス
- 第13回 学習心理学2 学習理論の応用（臨床心理学やマイクロ経済学への応用）
- 第14回 まとめ 実験心理学の今後の方向性
- 第15回 試験

5. 評価方法・基準

試験 80%（中間の確認テストを含む）、出席 20%で評価する。

6. 履修上の注意事項、授業時間外における学習等

7. 教科書・参考文献

教科書：定めない。適宜、印刷資料を配布する。

参考文献：例えば、木村裕他(2000)『はじめてまなぶ心理学・第二版』アートアンドブレイン社

8. オフィスアワー等

質問等は、授業直後、あるいは本務校 E-mail (mugi@fukuoka-pu.ac.jp) にて受付。

心理学Ⅱ Psychology II (金曜 2 限)

全学科 第2、3 年次 後期 選択必修 2 単位

担当教員 麦島 剛

1. 概要

●授業の概要

近年の社会変化（格差社会への変化等）に伴う抑うつ・自殺・いじめなどの臨床心理学的問題がひろく注目されるようになった。また、ゆとり教育・習熟度別授業・特別支援学校（学級）など、教育をめぐる議論が盛んである。これらの問題の検討と解決のためには、確かな心理学理論の理解が必要となる。

心理学Ⅰが実験心理学の概説であるのに対し、本授業では教育・社会系心理学を概説する。

●授業の目的

教育・社会系心理学について理解し、総合的な人間理解の一角を築くことを目的とする。なお、前期に心理学Ⅰ（麦島）を受講しているほうが本授業を理解しやすいと思われる。

2. キーワード

発達心理学・人格・知能・臨床心理学・心理療法・社会心理学・組織心理学

3. 到達目標

教育・社会系心理学全般に対する知識（理論と現象の両面）を身に着けること。

4. 授業計画

- 第1回 オリエンテーション こころの問題の高まりについて
- 第2回 発達心理学1 発達理論の基本
- 第3回 発達心理学2 ピアジェの理論を中心とした発達理論（1）
- 第4回 発達心理学3 ピアジェの理論を中心とした発達理論（2）
- 第5回 教育心理学 発達障害児への支援を中心に
- 第6回 人格と知能の心理学1 性格とは？
- 第7回 人格と知能の心理学2 知能とは？
- 第8回 臨床心理学1 精神病理学
- 第9回 臨床心理学2 各種の心理療法（1）
- 第10回 臨床心理学3 各種の心理療法（2）
- 第11回 社会心理学1 社会的認知
- 第12回 社会心理学2 対人行動
- 第13回 組織心理学 組織行動論に基づく成果主義的人事の検討
- 第14回 まとめ 心理学と現代社会
- 第15回 試験

5. 評価方法・基準

試験 80%（中間の確認テストを含む）、出席 20%で評価する。

6. 履修上の注意事項、授業時間外における学習等

7. 教科書・参考文献

教科書：定めない。適宜、印刷資料を配布する。

参考文献：例えば、木村裕他(2000)『はじめてまなぶ心理学・第二版』アートアンドブレイン社

8. オフィスアワー等

質問等は、授業直後、あるいは本務校 E-mail (mugi@fukuoka-pu.ac.jp) にて受付。

教育心理学 Educational Psychology (月曜1・2限)

全学科 第1、2年次 前期 選択必修 2単位

担当教員 今村 義臣

1. 概要

●授業の背景

児童・生徒を指導・教育する立場にある者は、環境をコントロールし、子ども達が最大限の心身の発達を達成できるように援助する必要がある。そのためには人間の心のしくみの理解が必要である。心理学は、科学的な視点から人間の心のしくみに関する知識を授けてくれる学問であり、教育心理学は、その中でも教育的観点に焦点付けを行った知識を授けてくれる。

●授業の目的

ここでは、教育心理学で最低必要な知識である、発達、学習、学級集団、知能、人格・適応、および、障害児心理の諸知識を学習する。そこでは、随所に最近の脳科学で得られた知見を交え、脳を中心に据えた心の理解を深めていきたい。

●授業の位置付け

教育心理学は教職専門科目の中でも重要な科目の1つである。また、他の心理学の講義を同時に学ぶことによって、人間行動に対するより深い理解が得られるものと思われる。

2. キーワード

教育心理学、行動科学、認知科学、臨床心理学

3. 到達目標

教育心理学で最低必要な知識（発達、学習、人格と適応、障害児教育等）の習得。

4. 授業計画

- 1回 オリエンテーション
- 2回 発達1 こころ（脳）の基本的メカニズムを成長と発達の観点から学ぶ。
- 3回 発達2
- 4回 発達3
- 5回 学習1 学習の原理と学習指導について学ぶ。
- 6回 学習2
- 7回 学習3
- 8回 学級集団 学級集団を把握するための理論・方法を学ぶ。
- 9回 知能 知能のメカニズムについて学ぶ。
- 10回 人格と適応1 人格と適応の諸理論を学ぶ。
- 11回 人格と適応2
- 12回 人格と適応3
- 13回 障害児1 障害児の心理と教育について学ぶ。
- 14回 障害児2
- 15回 試験

5. 評価方法・基準

期末試験で評価する。60点以上を合格とする。

6. 履修上の注意事項、授業時間外における学習等

配布資料は常に持参すること。ノートをとること。

7. 教科書・参考書

●教科書

中西信男・三川俊樹編『新教職課程の教育心理学』ナカニシヤ出版 371.4/N-19

●参考書

適宜紹介する。

8. オフィスアワー等

E-mail アドレス：gishin@std.mii.kurume-u.ac.jp

教育学Ⅰ

Pedagogy I, the 2st period, Monday (月曜2限)

全学科 第1、2年次 前期 選択必修 2単位

担当教員 東野 充成

1. 概要

●授業の目的

家族と教育に焦点を合わせる。普遍的な現象と考えられがちな家族であるが、その形態や機能は、時代や文化によって様々に変化する。本講義では、家族が有する形態や機能を理解したうえで、現代日本の家族を取り巻く諸問題について考察を深められるようにする。

●授業の位置付け

まず、時代及び文化による家族のあり方の多様性について講義する。その上で、現代我々が自明視している家族が登場する過程について概観する。そして、現代家族が持つ教育機能とともに、それを取り巻く多様な問題群について考察を深められるようにする。

2. キーワード

近代家族 少子化 性別役割分業

3. 到達目標

- ①家族に関して相対的・批判的な思考方法を獲得できるようにする。
- ②現代家族を取り巻く諸問題について、自らの思考や考えを深められるようにする。

4. 授業計画

授業は講義形式で行う。配布資料、視聴覚教材を適宜使用する。

- 1回 家族の誕生
- 2回 日本近代家族の誕生
- 3回 結婚への途
- 4回 結婚を阻まれる人たち
- 5回 少子化は悪か？
- 6回 生殖技術と家族
- 7回 中絶と避妊のポリティクス
- 8回 「子をもつ」ということ
- 9回 青年期と家族
- 10回 児童虐待のポリティクス
- 11回 家族のリストラクチャリング
- 12回 現代の家族政策
- 13回 新しい「家族」のカタチ
- 14回 まとめ
- 15回 試験

5. 評価方法・基準

小レポート 30%

期末レポート 70%

レポート評価に当たっては、論理的に論が展開されているかを重視する。

6. 履修上の注意事項、授業時間外における学習等

- 講義内容の十分な理解を得るため、下記の参考文献を各自読むこと。
- 最高裁判所のホームページなどを通して、家族に関する判例に目を通すこと。
- その他参考となる図書や判例、資料等を授業の中で随時紹介していく。

7. 教科書・参考文献

●教科書 特に指定しない。

●参考文献

広田照幸『日本人のしつけは衰退したか』講談社現代新書 379.9/H-3

山田昌弘『パラサイトシングルの時代』ちくま新書 367.4/Y-1

8. オフィスアワー

研究室扉の掲示を参照のこと。なお、授業に関する質問等は、下記のメールアドレスで随時受け付ける。

higashi@dhs.kyutech.ac.jp

教育学Ⅰ

Pedagogy I, the 1st period, Friday (金曜 2 限)

全学科 第2、3 年次 前期 選択必修 2 単位

担当教員 東野 充成

1. 概要

●授業の目的

現代日本の教育問題について、臨床教育社会学の立場から講義する。講義を通して、教育問題に関する一定の理解を得るとともに、巷間に流布している教育言説を相対化しうる視点を獲得することを目的とする。また、レポート課題を通して、文章表現能力の育成も目的とする。

●授業の位置付け

本講義では、臨床教育社会学という立場から教育問題について講義する。臨床の知は、科学の知に対して、現場への参与や解決に資する実践性を重視するところにその特徴があるが、本講義でもこうした立場に則り、アクチュアルな事例を紹介していく。と同時に、単純な因果論や責任論、対策論に帰することなく、教育問題そのものが生成していく過程に、構築主義の観点から迫っていく。

2. キーワード

教育問題・教育病理 臨床教育社会学 社会問題の構築主義

3. 到達目標

- ①現代日本の教育問題に関する理解を深める。
- ②教育問題そのものが生成する過程についても理解を深め、通俗的な教育言説を相対化する視点を得る。
- ③レポート課題を通して、文章表現能力を高める。

4. 授業計画

授業は講義形式で行う。配布資料、視聴覚教材を適宜使用する。

- 1 回 臨床教育社会学と社会問題の構築主義
- 2 回 少年犯罪言説と少年法改正
- 3 回 少年司法のポリティクス
- 4 回 地域防犯活動と子どもの安全環境
- 5 回 被害者なき犯罪
- 6 回 淫行規制条例のポリティクス
- 7 回 「有害メディア」規制のポリティクス
- 8 回 ニートとは誰か？
- 9 回 児童虐待と監視される家族
- 10 回 不登校と公教育の揺らぎ
- 11 回 いじめ自殺と子ども・家族・学校
- 12 回 マイノリティと学校教育
- 13 回 ジェンダーフリー教育論争
- 14 回 まとめ
- 15 回 試験

5. 評価方法・基準

小レポート 30%
期末レポート 70%

レポートの評価に当たっては、論理的に論が展開されているかを重視する。

6. 履修上の注意事項、授業時間外における学習等

- ①講義内容の十分な理解を得るため、下記の参考文献を各自読むこと。
- ②最高裁判所のホームページなどを用いて、少年事件や憲法・刑法に関する判例に目を通すこと。
- ③その他参考となる図書や判例、資料等を授業の中で随時紹介していく。

7. 教科書・参考文献

●教科書 特に指定しない。

●参考文献

酒井朗編著『学校臨床社会学』放送大学出版会 375.9/H-4
浜井浩一他『犯罪不安社会』光文社 368.6/H-2

8. オフィスアワー

研究室扉の掲示を参照のこと。なお、授業に関する質問等は、下記のメールアドレスで随時受け付ける。

higashi@dhs.kyutech.ac.jp

教育学Ⅱ

Pedagogy II, the 2st period, Monday (月曜 2 限)

全学科 第1、2 年次 後期 選択必修 2 単位

担当教員 東野 充成

1. 概要

●授業の目的

近年、子どもの位置づけが大きく変貌しつつある。そもそも子どもとは決して自明の存在ではなく、歴史的な過程の中で構築されてきた存在である。近代以降我々は、その小さな外観をした人間に愛着を抱き、保護や教育という営みを連綿となしてきた。ところが、近年、子どもにまつわる保護や権利、責任、自由といった考え方、また子どもそのものに対する考え方が大きく変動している。本講義では、こうした子ども観の揺らぎについて概観するとともに、それがどういった社会的背景から生成しているのか探求する。

●授業の位置付け

はじめに、西洋や日本において子どもが生成してくる過程そのものについて講義する。その上で、子どもの権利条約、子どもとセクシュアリティを巡る問題などアクチュアルな事例を取り上げ、子どもの権利や責任、自由、自己決定権といった概念について講義する。

2. キーワード

子ども観 日本国憲法 子どもの権利条約 自己決定権 セクシュアリティ

3. 到達目標

- ①子どもの相対性・構築性について理解すること。
- ②自由や責任、権利、自己決定権といった諸概念について理解を深めること。

4. 授業計画

授業は講義形式で行う。配布資料、視聴覚教材を適宜使用する。

- 1 回 子どもと子ども観
- 2 回 教育権論争
- 3 回 教科書裁判
- 4 回 義務教育就学拒否は可能か？
- 5 回 国公立女子校に男子は入学できるのか？
- 6 回 子どもの権利条約
- 7 回 校則と自己決定権
- 8 回 思想・信教の自由と学校
- 9 回 内申書開示請求事件
- 10 回 体罰と子どもの人権
- 11 回 いじめ自殺と子ども・家族・学校
- 12 回 学校事故と国賠請求事件
- 13 回 子どもとセクシュアリティ
- 14 回 まとめ
- 15 回 試験

5. 評価方法・基準

小レポート 30%
期末レポート 70%

レポート評価に当たっては、論理的に文章が展開されているかを重視する。

6. 履修上の注意事項、授業時間外における学習等

- ①講義内容の十分な理解を得るため、下記の参考文献を各自読むこと。
- ②最高裁判所のホームページなどを用いて、少年事件や憲法・教育法に関する判例に目を通すこと。
- ③その他参考となる図書や判例、資料等を授業の中で随時紹介していく。

7. 教科書・参考文献

●教科書 特に指定しない。

●参考文献

東野充成『子ども観の社会学』大学教育出版 367.6/H-3
佐々木幸寿他『憲法と教育』学文社 本館 図書館 373.2/S-8

8. オフィスアワー

研究室扉の掲示を参照のこと。なお、授業に関する質問等は、下記のメールアドレスで随時受け付ける。

higashi@dhs.kyutech.ac.jp

教育学Ⅱ

Pedagogy II, the 2st period, Friday (金曜 2 限)

全学科 第2、3 年次 後期 選択必修 2 単位

担当教員 東野 充成

1. 概要

●授業の目的

現代教育が果たす、社会的選抜や人材養成の機能について講義する。特に、現代の高等教育が産業や社会にどういった役割を果たし、個人の志向と社会からの要請とをマッチングさせているのか、あるいはさせていないのかについて理解することを目的とする。そこから、自身が現在所属している高等教育や、近い将来参加するであろう産業や政治の問題点を批判的に考察しうる視点及び表現力を獲得することも目的とする。

●授業の位置付け

現代教育は、個人の人格の完成を目指しつつ、個人を適切な社会的な位置へと振り分ける選抜・配分の機能も同時に果たしている。そこから、社会が要請する人材と教育が完成しようとする人間像との一致や矛盾、齟齬なども生み出される。本講義では、現代の高等教育や教育政策の有効性や限界を反省的に考察できる視点を獲得することを目的とする。

2. キーワード

選抜・配分 人材養成・人的資本論 教育投資 教育政策・教育改革 高等教育

3. 到達目標

- ①教育の持つ選抜・人材養成機能について理解すること。
- ②現代の高等教育や教育政策の有効性・限界を把握できるようにすること。
- ③文章表現能力を身につけること。

4. 授業計画

授業は講義形式で行う。配布資料、視聴覚教材を適宜使用する。

- 1 回 教育と社会・経済・政治
- 2 回 就学率と教育の発展段階モデル
- 3 回 近代日本の教育発展
- 4 回 途上国の教育問題
- 5 回 個人的投資としての教育
- 6 回 社会的投資としての教育
- 7 回 教育と市場のメカニズム
- 8 回 高学歴化と職業構造の変化
- 9 回 教育・職業・ジェンダー
- 10 回 戦後日本の教育史
- 11 回 教育問題と教育政策
- 12 回 現代教育改革の動向
- 13 回 日本型学歴主義の展開
- 14 回 まとめ
- 15 回 試験

5. 評価方法・基準

小レポート 30%

期末レポート 70%

レポート評価に当たっては、論理的に文章が展開されているかを重視する。

6. 履修上の注意事項、授業時間外における学習等

- ①講義内容の十分な理解を得るため、下記の参考文献に各自目を通すこと。
- ②各大学のホームページや企業の求人広告、就職サイトなどに授業時間外に目を通し、大学や就職に関する基礎的な知識を身につけておくこと。

7. 教科書・参考文献

●教科書 特に指定しない。

●参考文献

マーチン・トロウ『高学歴社会の大学』新潮選書 377/T-3

天野郁夫『学歴の社会史』UP 選書 372.1/A-3

8. オフィスアワー

研究室扉の掲示を参照のこと。なお、授業に関する質問等は、下記のメールアドレスで随時受け付ける。

higashi@dhs.kyutech.ac.jp

教育原理

Principle of Education, the 1st period, Monday (月曜 1 限)

全学科 第1、2 年次 前期 選択必修 2 単位

担当教員 東野 充成

1. 概要

●授業の目的

教育職員免許法に規定されている「教育の理念並びに教育に関する歴史および思想」に関して講義を行い、次の点を目標とする。

- ①教育を広く人間全体の営みの中に位置づけ、多角的に考察すること。
- ②子どもの発達・学習に関わる様々なエージェントの役割について理解するとともに、現代社会における子どもの育ちと学びについて理解を深めること。
- ③現代の学校教育を歴史的、国際比較的に見直し、その役割や意義とともに、課題についても探求できること。
- ④以上の点を踏まえて、自らが志向する教育観や子ども観を構築し、表現できるようにすること。

●授業の位置付け

授業は、大きく次の3つの柱からなる。

- ①教育には様々な近接する概念が存在する。本授業では、教育にまつわる多様な概念を解説した上で、教育的人間関係や教授法などの変遷に見る教育思潮、教育観などを講義する。
- ②子どもという存在は決して自明のものではなく、時代や空間が異なれば、子どもに対する考え方や発達のあり方も大きく異なる。本授業では、歴史的、通文化的な子どもや発達の多様性を踏まえたうえで、現代社会における子どもの発達・学習の課題等について講義する。
- ③学校教育は現在、教育の中心的な場となっているが、その役割や課題とはいかなるものなのか。現代の学校教育を歴史的、国際比較的に相対化し、その課題や役割について講義する。

2. キーワード

子ども観・教育観 生涯発達・生涯学習 初等教育・中等教育 職業教育 教育問題

3. 到達目標

- ①自らの子ども観・教育観を深め、志向する教育制度や教育実践を表現できるようにする。
- ②多角的な営みとしての教育について、理解を深められるようにする。

4. 授業計画

授業は講義形式でおこなう。配布資料や視聴覚教材等を適宜使用する。

- 1 回 「教育」及びその近接概念について
- 2 回 教育的人間関係の基本構造と教育者の条件
- 3 回 教授法の変遷に見る教育観
- 4 回 「子ども」と「大人」の思想史
- 5 回 教育と子育て
- 6 回 諸外国及び日本の学校教育制度の概要
- 7 回 近代日本の教育の歴史と法制
- 8 回 初等教育の現状と課題
- 9 回 中等教育の現状と課題
- 10 回 高等教育の現状と課題
- 11 回 家族・学校・地域の連携
- 12 回 不登校といじめ問題
- 13 回 児童虐待と少年犯罪
- 14 回 現代教育の再構築－情報化社会と生涯学習－
- 15 回 試験

5. 評価方法・基準

小レポート 30%

期末テスト 70%

期末テストは論述式で行う。また、小レポート作成に当たっては、論理的に文章が展開されているかを重視する。

6. 履修上の注意事項、授業時間外における学習等

- ①教員免許（数学）取得希望者は必ず履修すること。教員免許（工業）取得希望者は、履修することがのぞましい。
- ②講義内容の十分な理解を得るため、下記の参考文献を各自読むこと。
- ③授業時間外には新聞等に目を通し、教育に関する最新の情報を摂取すること。

7. 教科書、参考文献

- 教科書は使わないが、そのつど参考文献を指示する。
- 参考文献
 - 柴田義松他 『教育原論』学文社 371/S-13
 - 田嶋一 『やさしい教育原理』371/T-4

8. オフィスアワー

研究室扉の掲示を参照のこと。なお、授業に関する質問等は、下記のメールアドレスで随時受け付ける。
higashi@dhs.kyutech.ac.jp

教育社会学

Sociology of Education, the 1st period, Monday（月曜1限）

全学科 第1、2年次 後期 選択必修 2単位

担当教員 東野 充成

1. 概要

●授業の目的

教育職員免許法に規定されている「教育に関する社会的、制度的又は経営的事項」に関して講義を行い、以下の点を目標とする。

- ①教育と社会の相互规定的な関係について理解する。
- ②教育制度を他の社会制度との関連の中で理解し、その役割や課題等について考察を深める。
- ③以上の点を踏まえて、現代の学校制度や学校経営の役割及び課題について理解する。

●授業の位置付け

授業は、大きく次の3つの柱からなる。

- ①教育は社会からいかなる影響を受け、また社会にいかなる影響を及ぼしているのか。階層、エスニシティ、ジェンダーといった社会学の基礎概念をもとに講義する。
- ②現代の教育制度はそれ単独で存在するわけではなく、雇用制度や法制度、行政組織などとの関連の中で位置づけられる。このような、教育制度の構造、機能及び他の社会制度との関連について講義する。
- ③教育を取り巻く社会情勢や教育制度の構造などを踏まえて、現代的な学校経営のあり方について講義する。

2. キーワード

文化伝達・文化的再生産 エスニシティ ジェンダー サブカルチャー 教育制度・教育政策 学校経営・学級経営

3. 到達目標

- ①教育社会学の考え方を理解すると同時に、社会科学の基本的な概念についても理解できるようにする。
- ②教育という現象を他の様々な社会現象との関係の中で捉えられるようにする。
- ③教育という現象の理解を通して、現代社会・現代文化・現代学校教育に対する相対的な視点を獲得する。

4. 授業計画

授業は講義形式で行う。配布資料や視聴覚教材等を適宜使用する。

- 1回 文化伝達としての教育－育児としつけ－
- 2回 文化的再生産と教育－家族・階層・言語－
- 3回 エスニシティと教育－人種、民族、国家－
- 4回 ジェンダーと教育
- 5回 メディアと教育
- 6回 現代の子ども文化
- 7回 現代の若者文化
- 8回 少年非行の社会学
- 9回 学校文化・教師文化・生徒文化
- 10回 学力とカリキュラムの社会学
- 11回 学校教育と職業
- 12回 教育政策の変遷と現在
- 13回 学校経営の現代的課題（1）
- 14回 学校経営の現代的課題（2）
- 15回 試験

5. 評価方法・基準

成績評価

小レポート	30%
期末テスト	70%

期末テストは論述式で行う。また、小レポート作成に当たっては、論理的に文章が展開されているかを重視する。

6. 履修上の注意事項、授業時間外における学習等

- ①教員免許（数学）取得希望者は、必ず履修すること。教員免許（工業）取得希望者は、履修することが望ましい。
- ②講義内容の十分な理解を得るため、下記の参考文献を各自読むこと。
- ③授業時間外には新聞等に目を通し、教育に関する最新の情報を摂取すること。

7. 教科書・参考文献

- 教科書 特に指定しないが、参考書をそのつど指示する。
- 参考文献
 - 荻谷剛彦ほか著『教育の社会学』有斐閣 371.3/S-8
 - 柴野昌山ほか著『教育社会学』有斐閣 376.3/S-3

8. オフィスアワー

研究室扉の掲示を参照のこと。なお、授業に関する質問等は、下記のメールアドレスで随時受け付ける。
higashi@dhs.kyutech.ac.jp

法学 Introduction to Japanese Law (月曜1・2限)

全学科 第1、2年次 後期 選択必修 2単位

担当教員 小野 憲昭

1. 概要

●授業の背景

私達が日常生活を円滑に営むためには、日常生活関係を規律する法を知っておく必要があります。

●授業の目的

身近な法律問題を素材としながら、私達の日常の生活関係を規律する法の存在や仕組みを知り、法律問題解決の技法、基本的な考え方を修得することを目的としています。

●授業の位置づけ

社会生活を営む上で必要な最低限度の決まりを知り、社会の一員として要求される素養を身につけ、社会における人間関係の有るべき姿を考えるきっかけにして頂きたいと思っています。

2. キーワード

規範、秩序、権利、責任、救済

3. 到達目標

私達の日常の生活関係を規律する法の存在や仕組みを知り、法律問題解決の技法、基本的な考え方を修得し、社会における人間関係の有るべき姿を考えるようになれること。

4. 授業計画

- 第1回 法学を学ぶ意味、法の世界観
- 第2回 法律とは何か、判例とは何か
- 第3回 法源、主要法典、法適用の原則を知る。
- 第4回 法律の解釈の仕方を知る①
- 第5回 法律の解釈の仕方を知る②
- 第6回 私法入門—民法の指導原理
- 第7回 民法上の権利
- 第8回 権利の限界—私権の公共性
- 第9回 権利の担い手としての資格①
- 第10回 権利の担い手としての資格②
- 第11回 権利の対象となる財産
- 第12回 取引行為と法①
- 第13回 取引行為と法②
- 第14回 取引行為と法③

5. 評価方法・基準

期末試験の結果（100％）で評価する。
60点以上を合格とする。

6. 履修上の注意事項、授業時間外における学習等

講義には毎回出席すること。

7. 教科書・参考書

●教科書

- 1) 五十嵐 清著 私法入門〔改訂3版〕有斐閣 324/I-2
- 2) 石川他編集代表『法学六法'09』信山社 320

●参考書

- 1) 中川 善之助著 泉 久雄補訂〔補訂版〕法学 日本評論社 321/N-8
- 2) 佐藤幸治他著『法律学入門〔第3版〕』有斐閣 321/S-6
- 3) 我妻栄＝有泉亨＝川井健『民法第2版1総則・物権法』勁草書房 324
- 4) 川井 健『民法総則第3版』有斐閣 324

8. オフィスアワー等

質問があれば講義の前後いつでも受け付けます。

日本国憲法

Constitutional Law in Japan (月曜1・2限)

全学科 第1、2年次 前期 選択必修 2単位

担当教員 小野 憲昭

1. 概要

●授業の背景

現代社会に生じているさまざまな問題を通じて日本国憲法の改正論議が盛んになってきています。我々にとって憲法とは何なのか、憲法の意味やその内容を正確に理解し、問題状況を把握し、その本質を見極めたうえで憲法の有るべき姿を考えなければならない時期がきています。

●授業の目的

日本国憲法が保障する国家統治の機構や、基本的人権保障制度の枠組みや目的、機能を明らかにするとともに、現代における憲法の意味や問題状況を理解することを目的としています。

●授業の位置づけ

国家統治の機構、基本的人権の保障が講義の中心ですが、憲法は、政治と密接な関係がありますから、憲法を学ぶことは、政治のあるべき姿を考える上でのきっかけとなりますし、我々が、個人として政治や国家といかに関わるべきかを考える上での有益な素材をえることができると思います。

2. キーワード

人権保障、自由、平等、平和、議会制民主主義

3. 到達目標

基本的人権がどのような仕組みのもとで守られるようになっていのかということを理解し、これから基本的人権をどのようにして守っていくべきなのかを主体的に考えることができるようになって欲しいと思います。

4. 授業計画

- 第1回 国家と法
- 第2回 憲法の意味・特質
- 第3回 日本憲法史
- 第4回 国民主権の原理
- 第5回 基本的人権の原理
- 第6回 法の下での平等・生命・自由・幸福追求
- 第7回 内心の自由
- 第8回 表現の自由
- 第9回 経済的自由
- 第10回 人身の自由
- 第11回 参政権・社会権
- 第12回 平和主義の原理
- 第13回 国家統治の機構①—国会・内閣
- 第14回 国家統治の機構③—裁判所・憲法保障

5. 評価方法・基準

期末試験の結果（100％）で評価する。
60点以上を合格とする。

6. 履修上の注意事項、授業時間外における学習等

講義には毎回出席すること。

7. 教科書・参考書

●教科書

- 1) 伊藤 正巳 著 憲法入門〔第4版〕有斐閣 323.1/I-17
- 2) 石川他編集代表『法学六法'09』信山社 320

●参考書

- 1) 清宮 四郎 著 憲法Ⅰ〔第3版〕有斐閣 323.1/K-12/1
- 2) 宮沢 俊義 著 憲法Ⅱ〔新版〕有斐閣 323.1/K-12/2
- 3) 佐藤 功 著 日本国憲法概説〔全訂五版〕学陽書房 323.1/S-5/5
- 4) 芦部 信喜 著 高橋和之 補訂 憲法 第三版 岩波書店 323.1/A-10

8. オフィスアワー等

講義の前後質問があればいつでも受け付けます。

社会学Ⅰ SociologyⅠ (月曜1・2限)

全学科 第1、2年次 前期 選択必修 2単位

担当教員 井上 寛

1. 概要

●授業の背景

人間の行動、社会そして文化の認識にとって社会科学の理論と経験的(=実証的)知見は重要である。前期のこの授業では、社会科学の一分野である社会学の応用に焦点をおく。

●授業の目的

異なる社会の差異と類似性を観察し、それらの比較社会的な分析によって社会現象の出現するメカニズムを学ぶ。

●授業の位置づけ

この授業を通して、現代の人間行動、社会、そして社会にかんする認識を深め、論理的な思考と社会的な表現の基礎を学ぶ。

2. キーワード

動機、価値志向、価値意識、逸脱、経営、社会階層、権力、政治、文化

3. 到達目標

現代のマスコミ、親族、社会階層、社会組織、教育、福祉、犯罪、政治、国際関係等についての基礎的な知識を習得し、現代社会についての認識を深める。

4. 授業計画:

- 第1回 導入講義
- 第2回 マスコミ1
- 第3回 マスコミ2
- 第4回 犯罪1
- 第5回 犯罪2
- 第6回 自殺
- 第7回 親族1
- 第8回 親族2
- 第9回 教育と社会階層1
- 第10回 教育と社会階層2
- 第11回 宗教と社会1
- 第12回 宗教と社会2
- 第13回 政治と社会1
- 第14回 政治と社会2
- 第15回 試験

5. 評価方法・基準

中間試験(30%)、期末試験(50%)、レポート(20%)によって評価する。

6. 履修上の注意事項、授業時間外における学習等

よく聞き、よく読み、よく発言し、よく書くこと。予習・復習とレポートの提出が要求される。

7. 教科書・参考書

最初の授業、また期間中に適宜紹介する。

8. オフィスアワー(面談時間)等

井上の研究室(共通教育研究棟3階)の前とホームページの掲示板に掲示している。

社会学Ⅰ SociologyⅠ (金曜2限)

全学科 第2、3年次 前期 選択必修 2単位

担当教員 井上 寛

1. 概要

●授業の背景

工学あるいは科学・技術とその成果は社会と直結しており、社会科学的な知識と認識能力の習得は必須の要請である。

●授業の目的

社会システム構造と過程にかんする諸理論の応用を特に政治社会学に焦点をおいて学ぶ。

●授業の位置づけ

これは選択必修の「社会学」の中級レベルとして位置づけられる。政治社会学の諸理論とその応用を学ぶことを通して、現代社会にかんする視野を広げ、あわせて社会科学的な認識能力と表現能力を修得することをめざす。

2. キーワード

産業化、都市化、民主化、都市化、社会階層、社会組織、権力、国家、社会的選択、象徴、文化

3. 到達目標

政治社会学の基礎概念と基礎理論を学び、政治現象についての異なる見方・議論を理解し、現象を評価する能力を修得することを目標とする。

4. 授業計画

- 第1回 普遍的な権力現象
- 第2回 社会と国家
- 第3回 社会階層
- 第4回 利害と組織
- 第5回 選挙と政党
- 第6回 投票行動
- 第7回 議会と権力
- 第8回 官僚制
- 第9回 司法と権力
- 第10回 象徴・文化と政治
- 第11回 社会的選択(1)
- 第12回 国際関係
- 第13回 正義・公正・公平
- 第14回 社会的選択(2)
- 第15回 試験

5. 評価方法・基準

中間試験(20%)、期末試験(30%)、授業中の積極性(30%)、レポート(20%)で評価する。100点満点のうち60点以上の場合を合格とする。

6. 履修上の注意事項、授業時間外における学習等

この授業は、選択必修科目「社会学」の中級として位置づけられる。授業では演習での課題達成とプレゼンテーションが要求される。

7. 教科書・参考書

授業の最初、また期間中に適宜紹介する。

8. オフィスアワー(面談時間)等

井上の研究室(共通教育研究棟3階)の前とホームページの掲示板に掲示している。

社会学Ⅱ SociologyⅡ (月曜1・2限)

全学科 第1、2年次 後期 選択必修 2単位

担当教員 井上 寛

1. 概要

●授業の背景

人間の行動、社会そして文化の認識にとって社会科学の理論と知見は重要である。後期のこの授業では、社会科学の一分野である社会学の基礎理論に焦点をおく。

●授業の目的

社会学の基礎理論として、行為（意思決定を含む）、相互作用（ゲーム理論を含む）、集合行為（集団と組織と社会ネットワークの理論を含む）、制度と規範、社会構造、複合社会システム、文化の基礎概念と基礎理論を学ぶ。

●授業の位置づけ

この授業を通して、人間と社会と文化についての論理的な思考と社会学の基礎理論を学ぶ。

2. キーワード

意思決定、ゲーム理論、紛争、集合行為、権力、制度、社会構造、文化、社会的選択

3. 到達目標

基礎概念を理解すること、意思決定の問題を解くことができること、相互作用を含む社会過程の基本モデルを理解できること、集合体と社会階層についての理論を理解できること。

4. 授業計画：

- 第1回 導入（自由と秩序、正義と多様性）
- 第2回 行為・相互作用・社会構造・制度・文化
- 第3回 個体の意思決定
- 第4回 コミュニケーション相互作用
- 第5回 相互作用（ゲーム理論）
- 第6回 相互作用（ゲーム理論）
- 第7回 社会構造とコミュニケーション
- 第8回 集合行為論と資源動員論
- 第9回 組織とネットワーク
- 第10回 資源配分と権力
- 第11回 制度・規範・文化
- 第12回 社会的選択（集合体の意思決定）
- 第13回 複合社会システム
- 第14回 複合社会システム
- 第15回 試験

5. 評価方法・基準

中間試験（30%）、期末試験（50%）、レポート（20%）によって評価する。100点満点のうち60点以上の場合を合格とする。

6. 履修上の注意事項、授業時間外における学習等

よく聞き、よく読み、よく発言し、よく書くこと。予習・復習とレポートの提出が要求される。

7. 教科書・参考書

授業の最初に、また期間中に適宜紹介する。

8. オフィスアワー（面談時間）等

井上の研究室（共通教育研究棟3階）の前とホームページの掲示板に掲示している。

社会学Ⅱ SociologyⅡ (金曜2限)

全学科 第2、3年次 前期 選択必修 2単位

担当教員 井上 寛

1. 概要

●授業の背景

工学あるいは科学・技術とその成果は社会と直結しており、社会科学的な知識と認識能力の習得は必須の要請である。

●授業の目的

社会システム構造と過程にかんする諸理論の応用を特に計量社会学的方法に焦点をおいて学ぶ。

●授業の位置づけ

これは選択必修の「社会学」の中級レベルとして位置づけられる。計量社会学の方法とその応用を学ぶことを通して、社会科学的な観察と分析の能力を学習し、あわせて表現能力を修得することをめざす。

2. キーワード

社会調査、クロス表分析、回帰分析、ブール代数分析

3. 到達目標

計量社会学の基礎理論と方法を学び、社会現象の計量分析を通して社会を分析する能力と、あわせて表現と発表の技法を修得することを目標とする。

4. 授業計画

- 第1回 行動の分布
- 第2回 社会調査
- 第3回 態度のクロス表分析
- 第4回 態度のクロス表分析
- 第5回 推測と検定
- 第6回 投票行動の回帰分析
- 第7回 投票行動の回帰分析
- 第8回 教育と社会階層のパス解析
- 第9回 教育と社会階層のパス解析
- 第10回 嗜好と評価の多次元尺度解析
- 第11回 潜在構造分析
- 第12回 分散共分散分析
- 第13回 ブール代数分析
- 第14回 時系列分析
- 第15回 試験

5. 評価方法・基準

中間試験（20%）、期末試験（30%）、授業中の積極性（20%）、レポート（20%）で評価する。100点満点のうち60点以上の場合を合格とする。

6. 履修上の注意事項、授業時間外における学習等

この授業は、選択必修科目「社会学」の中級として位置づけられる。予習・復習と、授業での演習及びプレゼンテーションが要求される。

7. 教科書・参考書

授業の最初と期間中に適宜紹介する。

8. オフィスアワー（面談時間）等

井上の研究室（共通教育研究棟3階）の前とホームページの掲示板に掲示している。

経済学Ⅰ EconomicsⅠ（月曜1・2限）

全学科 第1、2年次 前期 選択必修 2単位

担当教員 李 友炯

1. 概要

●授業の目的

一国の経済における諸問題及び政府の経済政策を理解するためには経済学、特にマクロ経済学の知識が必要である。本講義ではマクロ経済学の標準的なテーマを取扱う。特に、戦後から現在に至るまでの日本経済の足跡を経済政策とその政策の背景にある経済理論を中心に考察することによってマクロ経済学に対する理解を深める。さらに、これらをベースに国際経済に関する基本理論を学び、日本経済と国際経済の将来について考えてみるのが本講義の目的である。

●授業の位置付け

最近、国際化や情報化の進展に伴い、経済システムも益々複雑になっているが、また経済に関する情報も簡単に入手できるようになった。しかしながら、その内容を理解して、それに対し自分なりの判断ができる人は意外と多くないと思われる。国内外の経済現状を理解するためには本授業で取り扱う諸理論に関する全般的な理解が必要である。

2. キーワード

「GDP」、「財政」、「金融」、「為替」、「景気」

3. 到達目標

- ・一国の経済の仕組みを学ぶことによって国際経済のメカニズムを理解する。
- ・現在われわれが直面している経済問題を分析し、問題解決の糸口を見出す力を養う。

4. 授業計画

- 1回 オリエンテーション
- 2回 戦後からの日本経済の歩み ①
- 3回 戦後からの日本経済の歩み ②
- 4回 国民経済計算 ①
- 5回 国民経済計算 ②
- 6回 財市場 ①
- 7回 財市場 ②
- 8回 貨幣市場①
- 9回 貨幣市場②
- 10回 財政金融政策 ①
- 11回 財政金融政策 ②
- 12回 国際経済 ①
- 13回 国際経済 ②
- 14回 まとめ

5. 評価方法・基準

レポート、小テスト、中間試験及び期末試験で評価する。

6. 履修上の注意事項、授業時間外における学習等

経済に関する理解を深めるために、Video on Demand (VOD) の貨幣・富・経済発展の歴史（英語版）の視聴を進める。VODは付属図書館のホーム・ページから視聴可能。

7. 教科書・参考書

授業中に適宜紹介する。

8. オフィスアワー

火曜日 14:00～16:00

質問や授業に関する意見があれば授業の前後いつでも受け付けます。

経済学Ⅰ EconomicsⅠ（金曜2限）

全学科 第2、3年次 前期 選択必修 2単位

担当教員 李 友炯

1. 概要

●授業の目的

経済活動を営む各主体はお互いに影響を及ぼしながら様々な意思決定を行っている。本講義では、「ゲーム理論」を通じてその意思決定の相互依存について考察する。特に、実際の経済社会で発生している様々な事例を取り上げ、戦略的思考に対する理解を深めることによって経済主体として合理的な意思決定能力の向上を目指す。

●授業の位置付け

複数の経済主体がそれぞれの目的の実現を目指して相互に依存している状況を認識し、そのような状況の下で戦略的思考法に基づく意思決定のメカニズムを理解する。

2. キーワード

「戦略的思考」、「意思決定」、「不確実性」

3. 到達目標

- ・ゲーム理論の基礎を学び、戦略的行動とは何かを理解する。
- ・様々な経済現象に対して合理的な判断ができる思考力を養う。

4. 授業計画

- 1回 オリエンテーション：市場と経済
- 2回 ゲーム理論の基礎
- 3回 戦略型ゲーム
- 4回 戦略的思考法
- 5回 展開型ゲーム①
- 6回 展開型ゲーム②
- 7回 交渉ゲーム①
- 8回 交渉ゲーム②
- 9回 繰り返しゲーム
- 10回 情報とゲーム①
- 11回 情報とゲーム②
- 12回 情報とゲーム③
- 13回 まとめ①：経済学とゲーム理論
- 14回 まとめ②

5. 評価方法・基準

授業への参加、レポート、中間試験及び期末試験で評価する。

6. 履修上の注意事項、授業時間外における学習等

経済に関する理解を深めるために、Video on Demand (VOD) の貨幣・富・経済発展の歴史（英語版）の視聴を進める。VODは付属図書館のホーム・ページから視聴可能。

7. 教科書・参考書

授業中に適宜紹介する。

8. オフィスアワー

火曜日 14:00～16:00

質問や授業に関する意見があれば授業の前後いつでも受け付けます。

経済学Ⅱ EconomicsⅡ（月曜1・2限）

全学科 第1、2年次 後期 選択必修 2単位

担当教員 李 友炯

1. 概要

●授業の目的

経済を理解するにあたって最も重要なのは市場メカニズムに対する理解である。本授業ではまず、経済主体の行動理論、特に消費者の行動や生産者の行動に関する理論を学んだ上、その理論に基づいて機能している市場メカニズムについて学ぶ。また、その市場が不完全競争状態である場合どのような問題が発生するか、そして実際われわれが住んでいる社会が抱えている市場構造の問題点について考察する。

●授業の位置付け

近年、社会における様々な現象を分析する研究分野において経済学の概念を導入することが増えている。特に、都市、交通、環境などの分野では費用便益分析、ヘドニック・アプローチやゲーム理論のような経済理論が頻繁に利用されるようになった。これらの経済理論を有効に使用するためには、本授業で取り扱う経済主体の行動理論や市場理論を理解することが不可欠である。

2. キーワード

「効用最大化」、「利潤最大化」、「市場メカニズム」、「不完全競争市場」

3. 到達目標

- ・各経済主体の合理的な行動原理について理解する。
- ・各経済主体の行動が市場の形成や既存市場に与える影響について理解する。
- ・様々な経済問題を常に市場メカニズムに基づいて考える能力を培う。

4. 授業計画

- 1回 オリエンテーション
- 2回 市場とは何か？
- 3回 需要と供給
- 4回 効率性と公正
- 5回 公共財と外部性
- 6回 消費者の行動 ①
- 7回 消費者の行動 ②
- 8回 生産者の行動 ①
- 9回 生産者の行動 ②
- 10回 市場均衡の理論 ①
- 11回 市場均衡の理論 ②
- 12回 市場理論の応用 ①
- 13回 市場理論の応用 ②
- 14回 まとめ

5. 評価方法・基準

レポート、小テスト、中間試験及び期末試験で評価する。

6. 履修上の注意事項、授業時間外における学習等

経済に関する理解を深めるために、Video on Demand (VOD) の貨幣・富・経済発展の歴史（英語版）の視聴を進める。VODは付属図書館のホーム・ページから視聴可能。

7. 教科書・参考書

授業中に適宜紹介する。

8. オフィスアワー

火曜日 14:00～16:00

質問や授業に関する意見があれば授業の前後いつでも受け付けます。

経済学Ⅱ EconomicsⅡ（金曜2限）

全学科 第2、3年次 後期 選択必修 2単位

担当教員 李 友炯

1. 概要

●授業の目的

本講義は、新聞やテレビで日々報道されている経済現象を正しく理解するために必要な経済学の基礎知識の習得を目的とする。特に、経済記事や経済関連統計データを用いて日本や世界の経済動向に対する理解を深め、経済主体が実際に直面する様々な経済現象を広い視野をもって分析・判断する能力を養う。

●授業の位置付け

日本や世界経済と関連する時事トピックスとそれに対する経済専門家や政府関係者のコメントを理解し、今我々が置かれている経済状況を分析・判断するために必要な知識を学ぶ。

2. キーワード

「時事経済」、「経済政策」、「日本と世界経済」

3. 到達目標

- ・関連する統計データを収集・分析し、経済の現況を理解する。
- ・時事トピックスを取り上げ、その背景にある経済理論を理解する。

4. 授業計画

- 1回 オリエンテーション
- 2回 マクロ統計と経済の動向 ①
- 3回 マクロ統計と経済の動向 ②
- 4回 マクロ統計と経済の動向 ③
- 5回 経済政策 ①
- 6回 経済政策 ②
- 7回 経済政策 ③
- 8回 企業と経済 ①
- 9回 企業と経済 ②
- 10回 日本経済 ①
- 11回 日本経済 ②
- 12回 日本と世界 ①
- 13回 日本と世界 ②
- 14回 まとめ

5. 評価方法・基準

授業への参加、レポート、中間試験及び期末試験で評価する。

6. 履修上の注意事項、授業時間外における学習等

経済に関する理解を深めるために、Video on Demand (VOD) の貨幣・富・経済発展の歴史（英語版）の視聴を進める。VODは付属図書館のホーム・ページから視聴可能。

7. 教科書・参考書

授業中に適宜紹介する。

8. オフィスアワー

火曜日 14:00～16:00

質問や授業に関する意見があれば授業の前後いつでも受け付けます。

政治学Ⅰ Political ScienceⅠ (月曜1・2限)

全学科 第1、2年次 前期 選択必修 2単位
担当教員 本田 逸夫

1. 概要

現代日本と世界をめぐる政治的・社会的諸問題とそれら相互のつながりについて、どちらかといえば日本国内に重点を置いて学ぶ。新聞記事・論文や著書(の抜粋)などの比較的読みやすいプリントや視聴覚的な教材を用い、具体的な知識を得るとともに理論的に考える訓練を行なう。一方通行的な授業ではなく、学生諸君の調査・発表(インターネットなども活用)、これをうけた討論などを重んじる。

政治学は民主主義国の市民あるいは「社会人」にとって必要な教養を含むが、だからといってそれを単にハウツー的な知識の集まりとすることはできない。また、高校までの学校教育やマスコミなどであつかわれる政治現象は、法制度や「政界」・時事などにかたよりがちである。そこでこの講義では、学問としての作法にしたがいがながら、政治現象と思想・教育・歴史・経済などとの密接な関係、および政治現象と日常生活との結びつきに注目して、広い視野から社会や科学について考える。その際に、みずから問題を見出し、かつ多様な意見や視点を考慮しこれらと対話することに注意する。こうした政治学系の講義の基礎編が月曜の政治学Ⅰ及びⅡである。

2. キーワード

政治的象徴、鉄の三角形、ナショナリズム、市民社会、NGO

3. 到達目標

政治学の基本的なものの考え方の習得をめざす。すなわち、政治学の基本的な概念やアプローチとその実例への適用の仕方を理解することが目標である。特に、(切り離してイメージされがちな)日常生活と政治現象の間の結びつきについて理解を深める。また、発表・討論などにより、多方向的なコミュニケーションの能力の養成をはかる。

4. 授業計画

- 第1回 本講義の内容と方式の説明。
- 第2回 ことばと政治 シンボル操作の問題など。ケース・スタディを含む。
- 第3回 ことばと政治 「言霊」観の問題など。ケース・スタディを含む。
- 第4回 「鉄の三角形」の意味と概要
- 第5回 「鉄の三角形」ケース・スタディ(1)。
- 第6回 「鉄の三角形」ケース・スタディ(2)。
- 第7回 政官関係・公益法人論など。
- 第8回 戦争と政治(1)。
- 第9回 戦争と政治(2)。
- 第10回 従来の講義の補足と展開。
- 第11回 ナショナリズム論(1)。
- 第12回 ナショナリズム論(2)。
- 第13回 市民的实践とNGO(1)。
- 第14回 市民的实践とNGO(2)。
- 第15回 試験。

ただし、以上の構成は時事やテキストなどの要素を考慮して変更することがある。

5. 評価方法・基準

期末試験(80%)およびレポートの結果(20%)で評価する。60点以上を合格とする。

6. 履修上の注意事項、授業時間外における学習等

上に述べたように、政治学は多方面の知識と関心が求められる総合的な性格が濃い。タコツボに閉じこもり自己満足するのは初めから学習がおぼつかない。世界史・日本史、思想、社会等々の基本的な知識、国語の能力などを復習(自ら補習)し、かつ生き生きとした現代的な問題意識をもって学ぶことが必要である。学生諸君の、積極的に授業に参加し、質問・討論する意欲的な姿勢を、期待する。プリントなどを自ら入手し、講義の前に読んでくるのは当然の前提である。

7. 教科書・参考書

- 教科書 なし。
- 参考書 講義の中で適宜紹介する。

8. オフィスアワー等

月曜日12時～13時30分。質問などは講義中・講義の前後、オフィスアワーの他に、次の電子メールでも受け付ける。

email:honda@dhs.kyutech.ac.jp

政治学Ⅰ Political ScienceⅠ (金曜2限)

全学科 第2、3年次 前期 選択必修 2単位
担当教員 本田 逸夫

1. 概要

後掲の諸テーマについて、資料を読みながら学び、政治学の基本的な概念や分析方法を学び、それらを用いて考察する能力を養成する。後半では、自由テーマによる演習方式も一部導入する。本講義では、全般に討論および論述に重点を置く。

2. キーワード

自由主義、現実主義、政治的責任、保守主義

3. 到達目標

政治学の基本的なものの考え方の運用能力の習得をめざす。すなわち、政治学の基本的な概念やアプローチを実例に適用し、多面的な分析と理論的な考察ができるようになること、これらの分析・考察を論理的に表現し、かつ討論により発展させること、が目標である。

4. 授業計画

- 第1回 本講義の内容と方式の説明
- 第2回 予備的な講義とディスカッション
- 第3回 自由主義と民主主義(1)
- 第4回 自由主義と民主主義(2)
- 第5回 現実主義(1)
- 第6回 現実主義(2)
- 第7回 従来の講義の補足と展開
- 第8回 政治的責任(1)
- 第9回 政治的責任(2)
- 第10回 保守主義(1)
- 第11回 保守主義(2)
- 第12回 従来の講義の補足と展開
- 第13回 自由テーマ(1)
- 第14回 自由テーマ(2)。
- 第15回 まとめ

ただし、以上の構成は時事やテキスト、学生諸君の関心などの要素を考慮して変更することがある。

5. 評価方法・基準

レポートの結果(100%)で評価する。
60点以上を合格とする。

6. 履修上の注意事項、授業時間外における学習等

政治学は多方面の知識と関心が求められる総合的な性格が濃い。タコツボに閉じこもり自己満足するのは初めから学習がおぼつかない。世界史・日本史、思想、社会等々の基本的な知識、国語の能力などを復習(自ら補習)し、かつ生き生きとした現代的な問題意識をもって学ぶことが必要である。学生諸君の、積極的に授業に参加し、質問・討論する意欲的な姿勢を、期待する。プリントなどを自ら入手し、講義の前に読んでくるのは当然の前提である。

7. 教科書・参考書

- 教科書 なし。
- 参考書 講義の中で適宜紹介する。

8. オフィスアワー等

月曜日12時～13時30分。質問などは講義中・講義の前後、オフィスアワーの他に、次の電子メールでも受け付ける。

email:honda@dhs.kyutech.ac.jp

政治学Ⅱ Political ScienceⅡ (月曜1・2限)

全学科 第1、2年次 後期 選択必修 2単位

担当教員 本田 逸夫

1. 概要

現代日本と世界をめぐる政治的・社会的諸問題とそれらの相互連関について、どちらかといえば国際的な関係や地球大の問題に重点を置いて学ぶ。講義では新聞記事・論文や著書(の抜粋)等の活字資料=プリントや視覚的な教材を活用し、具体的な知識の獲得と理論的思考の訓練を行なう。一方通行的な講義=筆記ではなく、学生諸君の調査・発表(インターネット等も活用)、これをうけた討論等を特に重視する。

政治学は民主主義国の市民あるいは「社会人」にとって必要な教養を含むが、だからといってそれを単にハウツー的な知識の集まりとすることはできない。また、高校までの学校教育やマスコミなどであつかわれる政治現象は、法制度や「政界」・時事などにかたよりがちである。そこでこの講義では、学問としての作法にしたがいがながら、政治現象と思想・教育・歴史・経済などとの密接な関係、および政治現象と日常生活との結びつきに注目して、広い視野から社会や科学について考える。その際に、みずから問題を見出し、かつ多様な意見や視点を考慮しこれらと対話することに注意する。こうした政治学系の講義の基礎編が月曜の政治学Ⅰ及びⅡである。

2. キーワード

政治的社会的化、地方自治、国際政治、軍事化、開発独裁、多文化主義。

3. 到達目標

政治学の基本的なものの考え方の習得をめざす。すなわち、政治学の基本的な概念やアプローチとその事例への適用の仕方を理解することが目標である。特に、(切り離してイメージされがちな)日常生活と政治現象の間の結びつきについて理解を深める。また、発表・討論などにより、多方向的なコミュニケーションの能力の養成をはかる。

4. 授業計画

- 第1回 本講義の内容と方式の説明。
- 第2回 教育と政治、民主主義との関連など。
- 第3回 教育と政治、ケース・スタディ(1)。
- 第4回 教育と政治、ケース・スタディ(2)。
- 第5回 教育と政治、ケース・スタディ(3)。
- 第6回 補足と展開
- 第7回 開発と補助金政治。
- 第8回 開発と地方自治。
- 第9回 戦争責任論。
- 第10回 開発をめぐる国際政治(1)。
- 第11回 開発をめぐる国際政治(2)。
- 第12回 軍事化と平和研究(1)。
- 第13回 軍事化と平和研究(2)。
- 第14回 開発教育論など。
- 第15回 試験。

ただし、以上の構成は時事やテキストなどの要素を考慮して変更することがある。

5. 評価方法・基準

期末試験(80%)およびレポートの結果(20%)で評価する。60点以上を合格とする。

6. 履修上の注意事項、授業時間外における学習等

上に述べたように、政治学は多方面の知識と関心が求められる総合的な性格が濃い。タコツボに閉じこもり自己満足するのでは初めから学習がおぼつかない。世界史・日本史、思想、社会等々の基本的な知識、国語の能力などを復習(自ら補習)し、かつ生き生きとした現代的な問題意識をもって学ぶことが必要である。学生諸君の、積極的に授業に参加し、質問・討論する意欲的な姿勢を、期待する。プリントなどを自ら入手し、講義の前に読んでくのは当然の前提である。

7. 教科書・参考書

- 教科書 なし。
- 参考書 講義の中で適宜紹介する。

8. オフィスアワー等

月曜日12時～13時30分。質問などは講義中・講義の前後、オフィスアワーの他に、次の電子メールでも受け付ける。

email:honda@dhs.kyutech.ac.jp

政治学Ⅱ Political ScienceⅡ (金曜2限)

全学科 第2、3年次 後期 選択必修 2単位

担当教員 本田 逸夫

1. 概要

後掲の諸テーマについて、資料を読みながら学び、政治学の基本的な概念や分析方法を学び、それらを用いて考察する能力を養成する。具体的なテーマとしては、グローバリゼーションの下での現代政治の世界的な諸課題を中心に検討する。後半では、自由テーマによる演習方式も一部導入する。本講義では、全般に討論および論述に重点を置く。

2. キーワード

ナショナリズム、文明の衝突、多元主義、寛容

3. 到達目標

政治学の基本的なものの考え方の運用能力の習得をめざす。すなわち、政治学の基本的な概念やアプローチを実例に適用し、多面的な分析と理論的な考察ができるようになること、これらの分析・考察を論理的に表現し、かつ討論により発展させること、が目標である。

4. 授業計画

- 第1回 本講義の内容と方式の説明
- 第2回 予備的な講義とディスカッション
- 第3回 ナショナリズム(1)
- 第4回 ナショナリズム(2)
- 第5回 ナショナリズム(3)
- 第6回 文明の衝突?(1)
- 第7回 文明の衝突?(2)
- 第8回 文明の衝突?(3)
- 第9回 従来の講義の補足と展開
- 第10回 多元主義(1)
- 第11回 多元主義(2)
- 第12回 多元主義(3)
- 第13回 自由テーマ(1)
- 第14回 自由テーマ(2)。
- 第15回 まとめ

ただし、以上の構成は学生諸君の関心や時事、テキストなどの要素を考慮して変更することがある。

5. 評価方法・基準

レポートの結果(100%)で評価する。

60点以上を合格とする。

6. 履修上の注意事項、授業時間外における学習等

上に述べたように、政治学は多方面の知識と関心が求められる総合的な性格が濃い。タコツボに閉じこもり自己満足するのでは初めから学習がおぼつかない。世界史・日本史、思想、社会等々の基本的な知識、国語の能力などを復習(自ら補習)し、かつ生き生きとした現代的な問題意識をもって学ぶことが必要である。学生諸君の、積極的に授業に参加し、質問・討論する意欲的な姿勢を、期待する。プリントなどを自ら入手し、講義の前に読んでくのは当然の前提である。

7. 教科書・参考書

- 教科書 なし。
- 参考書 講義の中で適宜紹介する。

8. オフィスアワー等

月曜日12時～13時30分。質問などは講義中・講義の前後、オフィスアワーの他に、次の電子メールでも受け付ける。

email:honda@dhs.kyutech.ac.jp

地域研究Ⅰ Regional StudiesⅠ（月曜1・2限）

全学科 第1、2年次 前期 選択必修 2単位
担当教員 成末 繁郎

1. 概要

●授業の背景

現在の世界では人・カネ・モノが国境を越えて自由にしかも迅速に交流するいわゆる「グローバル化」が進行している。この状況を準備したのが「近代化」という「西欧化」の流れであった。しかし、世界がこぞって西欧化しグローバルに均一化していく一方で、同時に伝統回帰（伝統の新たな発明であるが）やローカル化の傾向も強まっている。即ち世界は同一の価値観やメディアを外見上共有しているように見えるが、実は各々の独自の伝統を表現する新たな媒体としてそれらをしたたかに流用しているのが実情なのである。しかしほぼ同一の媒体が使用されるために、差異が微妙なものとなり、多様な価値観の存在が見えにくくなっているのも事実である。そしてこのことが従来よりも深刻な誤解を生じさせる状況を産み出していると考えられる。

●授業の目的

そこでこの講義では地域社会ごとの細かな差異の研究に専心してきた「文化人類学」の手法を使って、微妙な差異をどのように見出し、解釈していくのが妥当なのかを考察していく。この過程で「相対主義的な」理解のやり方を身につけることが目指される。

●授業の位置付け

具体的な地域として取り上げるのは主に東南アジアからタイ王国、ビルマ（ミャンマー）及びインドネシア、そしてメラネシアからはパプア・ニューギニアの多様な人々の部族的な社会等々であるので、仏教・イスラム教・アニミズム等々の宗教的な知識や呪術を含めた「科学的または哲学的」知識についても触れる。またタイ王国については均一化とローカル化との間きあい具体的な映像資料を通して見ることで、今現在の具体的な状況の把握もできるように構成する予定である。前期は小規模なコミュニティの社会構造の中核をなす親族構造に焦点を置く。（関連する学習教育目標：X）

2. キーワード

文化相対主義、シンボル論、社会構造、出自理論と縁組理論、構造主義

3. 到達目標

相対主義的に考えるという disposition を身につけること。「文化」に関する差異を敏感に感じ取れるようになること。

4. 授業計画

- 第1回 「文化」という概念の定義
- 第2回 文化相対主義の問題点
- 第3回 象徴人類学から見た文化の概念
- 第4回 グローバル化を考える1 Hip-Hopの感染力その1
- 第5回 親族の解釈学1-親族分類の多様性、概念整理
- 第6回 親族の解釈学2-普遍的な解釈（親族の代数学）
- 第7回 親族の解釈学3-相対的な解釈
- 第8回 グローバル化を考える2 アイドルの普遍性その1
- 第9回 結婚の多様性と結婚の「本質」
- 第10回 インセスト・タブーの多様性
- 第11回 インセスト・タブーの存在理由
- 第12回 グローバル化を考える3 ロックの浸透力その1
- 第13回 世界観パート1-構造主義入門：親族の基本構造分析
- 第14回 世界観パート2-構造主義の展開編：神話分析（あるいは「奇妙な言説」の解説法）
- 第15回 試験

5. 評価方法・基準

期末試験及びレポート（95%）、出席（5%）で評価する。60点以上を合格とする。

6. 履修上の注意事項、授業時間外における学習等

時折、出席を取るので注意すること。

7. 教科書・参考書

●教科書

特になし。適宜プリントを配布する。

●参考書

- 1) Roy Wagner 1978 Lethal Speech. Cornell University Press..
- 2) Stephen A. Tyler (ed.) 1969 Cognitive Anthropology. Holt, Rinehart and Winston, inc.
- 3) E. R. Leach (ed.) 1968 Dialectic in Practical Religion. Cambridge University Press.

8. オフィスアワー等

講義中及び講義前、講義終了直後等に気軽に質問してください。

地域研究Ⅰ Regional StudiesⅠ（金曜日2限）

全学科 第2、3年次 前期 選択必修 2単位
担当教員 成末 繁郎

1. 概要

●授業の背景

現在の世界では人・カネ・モノが国境を越えて自由にしかも迅速に交流するいわゆる「グローバル化」が進行している。この状況を準備したのが「近代化」という「西欧化」の流れであった。しかし、世界がこぞって西欧化しグローバルに均一化していく一方で、同時に伝統回帰（伝統の新たな発明であるが）やローカル化の傾向も強まっている。即ち世界は同一の価値観やメディアを外見上共有しているように見えるが、実は各々の独自の伝統を表現する新たな媒体としてそれらをしたたかに流用しているのが実情なのである。しかしほぼ同一の媒体が使用されるために、差異が微妙なものとなり、多様な価値観の存在が見えにくくなっているのも事実である。そしてこのことが従来よりも深刻な誤解を生じさせる状況を産み出していると考えられる。

●授業の目的

そこでこの講義では地域社会ごとの細かな差異の研究に専心してきた「文化人類学」の手法を使って、微妙な差異をどのように見出し、解釈していくのが妥当なのかを考察していく。この過程で「相対主義的な」理解のやり方を身につけることが目指される。

●授業の位置付け

東南アジアからタイ王国、ビルマ（ミャンマー）及びインドネシア、そしてメラネシアからはパプア・ニューギニアの多様な人々の部族的な社会等々に関する定評のある複数の民族誌を詳細に解説していく。またタイ王国については均一化とローカル化との間きあい具体的な映像資料を通して見ることで、今現在の具体的な状況の把握もできるように構成する予定である。前期は小規模なコミュニティの社会構造の中核をなす親族構造やジェンダーを具体的な事例に即して考察を進める。（関連する学習教育目標：X）

2. キーワード

親族名称、シンボル論、贈与交換と市場交換、ジェンダー、アナロジー

3. 到達目標

相対主義的に考えるという disposition を身につけること。フィールド・ワークという調査手法を理解すること。「文化」に関する差異を敏感に感じ取れるようになること。

4. 授業計画

- 第1回 フィールド・ワークの方法論1：理論編
- 第2回 フィールド・ワークの方法論2：実践編
- 第3回 ニューギニアのダリビ族の民族誌：アナロジックな親族
- 第4回 ニューギニアのダリビ族の民族誌（続き）
- 第5回 ニューギニアのGimi族の民族誌：交代するジェンダー
- 第6回 ニューギニアのPaiela族の民族誌：女が成長のエージェント
- 第7回 ニューギニアのHagenの人々の民族誌：アナロジックなジェンダー
- 第8回 グローバル化を考える1 Hip-Hopの感染力その1
- 第9回 ニューギニアのHagenの人々の民族誌（続き）
- 第10回 ニューギニアのpersonの概念とagentの概念：市場交換システムと贈与交換システム
- 第11回 東南アジアの民族誌：イントロダクション
- 第12回 グローバル化を考える2 アイドルの普遍性その1
- 第13回 東北タイ：生活世界分類と民族生物分類学1
- 第14回 東北タイ：生活分類と民族生物分類学2
- 第15回 試験

5. 評価方法・基準

期末試験及びレポート（95%）、出席（5%）で評価する。60点以上を合格とする。

6. 履修上の注意事項、授業時間外における学習等

時折、出席を取るので注意すること。

7. 教科書・参考書

●教科書

特になし。適宜プリントを配布する。

●参考書

- 1) Roy Wagner 1967. The Curse of Souw. CornellUniversity Press.. 389.7/W-1
- 2) Tambiah, S. J., 1985, Culture, Thought, and SocialAction An Anthropological Perspective, HarvardUniversity Press.
- 3) E. R. Leach 1995『高地ビルマの政治体系』（訳：関本照夫）弘文堂.
- 4) Marilyn Strathern. 1988. The Gender Of the GiftProblems with Women and Problems with Society inMelanesia. University of California Press.

8. オフィスアワー等

講義中及び講義前、講義終了直後等に気軽に質問してください。

地域研究Ⅱ Regional StudiesⅡ（月曜1・2限）

全学科 第1、2年次 後期 選択必修 2単位

担当教員 成末 繁郎

1. 概要

●授業の背景

現在の世界では人・カネ・モノが国境を越えて自由にしかも迅速に交流するいわゆる「グローバル化」が進行している。この状況を準備したのが「近代化」という「西欧化」の流れであった。しかし、世界がこぞって西欧化しグローバルに均一化していく一方で、同時に伝統回帰（伝統の新たな発明であるが）やローカル化の傾向も強まっている。即ち世界は同一の価値観やメディアを外見上共有しているように見えるが、実は各々の独自の伝統を表現する新たな媒体としてそれらをしたたかに流用しているのが実情なのである。しかしほぼ同一の媒体が使用されるために、差異が微妙なものとなり、多様な価値観の存在が見えにくくなっているのも事実である。そしてこのことが従来よりも深刻な誤解を生じさせる状況を産み出していると考えられる。

●授業の目的

そこでこの講義では地域社会ごとの細かな差異の研究に専心してきた「文化人類学」の手法を使って、微妙な差異をどのように見出し、解釈していくのが妥当なのかを考察していく。この過程で「相対主義的な」理解のやり方を身につけることを目指す。

●授業の位置付け

具体的な地域として取り上げるのは主に東南アジアからタイ王国、ビルマ（ミャンマー）及びインドネシア、そしてメラネシアからはパプア・ニューギニアの多様な人々の部族的な社会等々であるので、仏教・イスラム教・アニミズム等々の宗教的な知識や呪術を含めた「科学的または哲学的」知識についても触れる。またタイ王国やイスラム諸国と欧米諸国とを対比させた映像資料を見ることで均一化とローカル化との間ぎあいを具体的に実感できるように構成する予定である。尚、前期とは異なり、後期はジェンダー・宗教（呪術）・国家に関するトピックを取り上げる。（関連する学習教育目標：X）

2. キーワード

ポスト・コロニアル、シンボル論、コスモロジー、構造主義、フェミニズム

3. 到達目標

相対主義的に考える disposition を身につけること。「文化」に関する差異を敏感に感じ取れるようになること。

4. 授業計画

- 第1回 ジェンダー パート1：定義と歴史的背景及びフェミニズムとの関係
- 第2回 ジェンダー パート2：その多様性と解釈
- 第3回 ジェンダー パート3：ポスト・モダンのジェンダー論
- 第4回 イスラムのジェンダーと欧米のジェンダーに関するビデオ上映
- 第5回 宗教 パート1：宗教の定義を巡って
- 第6回 宗教 パート2：呪術の効果を如何に解釈するか《その①》
- 第7回 宗教 パート3：呪術の効果を如何に解釈するか《その②》
- 第8回 グローバル化を考える4 Hip-Hopの感染力その2
- 第9回 事例研究1 東北タイの除霊儀礼、中央タイの仏教的治療カルト
- 第10回 事例研究2 北部タイの精霊信仰－祖先の祟りを巡って－
- 第11回 事例研究3 ニューギニアのホログラフィックな世界－隠喩のフォース－
- 第12回 グローバル化を考える5 ロックの浸透力その2
- 第13回 植民地化の中の東南アジアの国家概念-劇場国家論
- 第14回 東南アジアの伝統的国家概念-銀河政体論
- 第15回 試験

5. 評価方法・基準

期末試験及びレポート（95%）、出席（5%）で評価する。
60点以上を合格とする。

6. 履修上の注意事項、授業時間外における学習等

時折、出席を取るので注意すること。

7. 教科書・参考書

●教科書

特になし。適宜プリントを配布する。

●参考書

- 1) Roy Wagner 1986 Symbols That Stand for Themselves. The University of Chicago Press..
- 2) Tambiah, S. J., 1985, Culture, Thought, and Social Action An Anthropological Perspective, Harvard University Press.
- 3) Marilyn Strathern, 1988. The Gender Of the Gift Problems with Women and Problems with Society in Melanesia. University of California Press.

8. オフィスアワー等

講義中及び講義前、講義終了直後等に気軽に質問してください。

地域研究Ⅱ Regional Studies Ⅱ（金曜2限）

全学科 第2、3年次 後期 選択必修 2単位

担当教員 成末 繁郎

1. 概要

●授業の背景

現在の世界では人・カネ・モノが国境を越えて自由にしかも迅速に交流するいわゆる「グローバル化」が進行している。この状況を準備したのが「近代化」という「西欧化」の流れであった。しかし、世界がこぞって西欧化しグローバルに均一化していく一方で、同時に伝統回帰（伝統の新たな発明であるが）やローカル化の傾向も強まっている。即ち世界は同一の価値観やメディアを外見上共有しているように見えるが、実は各々の独自の伝統を表現する新たな媒体としてそれらをしたたかに流用しているのが実情なのである。しかしほぼ同一の媒体が使用されるために、差異が微妙なものとなり、多様な価値観の存在が見えにくくなっているのも事実である。そしてこのことが従来よりも深刻な誤解を生じさせる状況を産み出していると考えられる。

●授業の目的

そこでこの講義では地域社会ごとの細かな差異の研究に専心してきた「文化人類学」の手法を使って、微妙な差異をどのように見出し、解釈していくのが妥当なのかを考察していく。この過程で「相対主義的な」理解のやり方を身につけることを目指す。

●授業の位置付け

具体的な事例として、主に東南アジアからタイ王国、ビルマ（ミャンマー）及びインドネシア、そしてメラネシアからはパプア・ニューギニアの多様な人々の部族的な社会等々の民族誌を取り上げるので、仏教・イスラム教・アニミズム等々の宗教的な知識や呪術を含めた「科学的または哲学的」知識についても触れことになる。またタイ王国やイスラム諸国と欧米諸国とを対比させた映像資料を見ることで均一化とローカル化との闘ぎあいを具体的に実感できるように構成する予定である。尚、前期とは異なり、後期は宗教（呪術）・国家に関するトピックを取り上げる。（関連する学習教育目標：X）

2. キーワード

ポスト・コロニアル、シンボル論、コスモロジー、構造主義、言語行為論。

3. 到達目標

相対主義的に考える disposition を身につけること。フィールド・ワークという調査手法を理解すること。「文化」に関する差異を敏感に感じ取れるようになること。

4. 授業計画

- 第1回 宗教を捉えるための概念整理（宗教・呪術の定義を中心に）
- 第2回 呪術論基礎（1）－表現的行為（象徴的コミュニケーション）と技術的行為。
- 第3回 呪術論基礎（2）－呪術の効果を巡って。
- 第4回 グローバル化を考える 3 Hip-Hopの感染力その2
- 第5回 事例検討1：構造主義による呪術の効果の解釈－象徴効果－北米インディアン・パナマ共和国のクナ族の治療儀礼。第6回 事例検討2：物語生成装置論－アフリカのザンデ族の呪術を中心に。因果関係とは何か。
- 第7回 事例検討3：言語行為論－アフリカのザンデ族の呪医と薬学。アナロジーの力。
- 第8回 グローバル化を考える 4 ロックの浸透力
- 第9回 事例検討4：Symbolic Obviationの観点からの呪術の分析－ニューギニア・ダリビ族のpobiと夢
- 第10回 事例検討5：中央タイの仏教カルトにおける病気治療
- 第11回 事例検討6：北部タイの精霊信仰2：呪術と祖先霊
- 第12回 東南アジアの国家論①-19世紀バリの都市国家：劇場国家論。
- 第13回 東南アジアの国家論②-タイ・ビルマ・ラオスの国家論：マンダラ国家論

第14回 総括

第15回 試験

5. 評価方法・基準

期末試験及びレポート（95%）、出席（5%）で評価する。
60点以上を合格とする。

6. 履修上の注意事項、授業時間外における学習等

時折、出席を取るので注意すること。

7. 教科書・参考書

●教科書

特になし。適宜プリントを配布する。

●参考書

- 1) Roy Wagner 1986 Symbols That Stand for Themselves, The University of Chicago Press..
- 2) Tambiah, S. J., 1985, Culture, Thought, and Social Action An Anthropological Perspective, Harvard University Press.
- 3) E. R. Leach (ed.) 1968 Dialectic in Practical Religion, Cambridge University Press. 389/L-8

8. オフィスアワー等

講義中及び講義前、講義終了直後等に気軽に質問してください。

哲学と現代 I Contemporary Philosophy I

全学科 第2・3・4年次 前期 選択 2単位

担当教員 中村 雅之

1. 概要

さまざまな具体例の分析を通じて、インターネット等を通じた情報の洪水の中で、確かな情報を見分け、議論の欺瞞を見抜く力を養う。

2. キーワード

虚偽論法、メディア・リテラシー

3. 到達目標

テキストが提出する問題について、担当者を決めて毎時間、発表してもらい、それをめぐって討論する。そのことにより、思考力・文章力・論理的表現力を養う。

4. 授業計画

テキストに従って、以下のテーマを扱う。

- 第1回～第3回 健康情報番組のウソ
- 第4回～第6回 リスクとベネフィット
- 第7回～第9回 フードファディズム
- 第10回～第12回 添加物バッシング
- 第13回～第15回 ニセ科学を見破る

5. 評価方法・基準

レポート 60%、毎回の発表と、討論への参加度 40%。

6. 履修上の注意事項、授業時間外における学習等

開講までに教科書を必ず手に入れておいて下さい。各回の担当者は、責任をもって準備すること。また、参加者は自宅でテキストを読んでおくこと。

7. 教科書・参考書

松永和紀 『メディア・バイアス』（光文社新書）404/M-28

8. オフィスアワー等

月曜日：15：00～16：00

哲学と現代Ⅱ Contemporary Philosophy Ⅱ

全学科 第2、3、4年次 後期 選択 2単位

担当教員 中村 雅之

1. 概要

科学技術が引き起こすさまざまな倫理的問題を、具体的な事例に即して考察する。

2. キーワード

生命倫理、環境倫理

3. 到達目標

テキストが提出する問題について、担当者を決めて毎時間、発表してもらい、それをめぐって討論する。そのことにより、思考力・文章力・論理的表現力を養う。

4. 授業計画

テキストに従って、以下のテーマを扱う。

第1回～第2回 科学と政治経済

第3回～第5回 自然志向の毘

第6回～第9回 警鐘報道の功罪

第10回～第15回 科学報道のメディア・リテラシー

5. 評価方法・基準

レポート60%、毎回の発表と、討論への参加度40%。

6. 履修上の注意事項、授業時間外における学習等

開講までに教科書を必ず手に入れておいて下さい。各回の担当者は、責任をもって準備すること。また、参加者は自宅でテキストを読んでおくこと。

7. 教科書・参考書

松永和紀 『メディア・バイアス』(光文社新書) 404/M-28

8. オフィスアワー等

月曜日：15:00～16:00

西洋社会史Ⅰ・Ⅱ History of European Society (金曜3限)

全学科 第2、3、4年次 前期・後期 選択 2単位

担当教員 水井 万里子

1. 概要

●授業の背景

歴史学の基本的な方法として、「社会史」という分野がある。これは、歴史上に生きた人々の日常生活や文化、生き方などに光をあてて、当時の社会を再構成し、理解を深めることを目的とする。政治史、経済史などの分野と違い、「社会史」には年表に表されるような事件や重大な出来事はあまり出てこない。むしろ、長い時間をかけてじっくりと社会が変化していく過程を捉えていく。こうした社会史の課題として「モノ」「コト」の歴史は重要で、それぞれの「モノ」「コト」の起源、変化の過程、現代にどうつながるかをゆっくりと追いながら社会の変容についても考えることができる。

●授業の目的

西洋史における社会、技術、産業、文化について、個別トピック(例えば「庭」「銀行」「鋼」「蒸気機関」など)を各履修者がそれぞれ選択し検討する。これらのトピックは産業革命の時期にドイツで著された技術・社会関連の事典の項目である。この事典項目を出発点として、「工業化」を世界史の上で比較的早い段階で経験したヨーロッパの社会について、トピックの歴史的起源も確かめながら深く理解する。

●授業の位置づけ

本科目は選択課題によるレポート作成を中心とした歴史学上級科目で、「自由課題」演習型の授業である。まず、18世紀末から19世紀にかけて書かれたヨハン・ベックマン『西洋事物起源』の項目群から履修者が各自のテーマを選び、登録した後は、自由に調査を進める。参考資料の収集は、本学の図書館だけでなく、公共図書館や他大学の図書館を利用して行う場合がある。これらの調査をもとにプログレスレポート1、2(以下PR1・PR2)およびファイナルレポート(以下FR)の計3本を作成し提出する。

個別発表も各履修者は必ず一回以上おこない、他履修者の発表への質疑もあわせて評価の対象とする。

2. キーワード

「西洋史」「技術史」「科学史」「社会史」

3. 到達目標

＜レポートに関する目標＞

- ①調査：インターネットで文献情報を検索し、必要があれば外部図書館を利用する。複数の資料を収集し、多面的に知識を得る。
- ②分析：収集した資料の情報を整理・分析する。これをもとにレポートの構成を考える。目次(章・節のかたち)にして表現する。
- ③プレゼンテーション：参考文献リスト、図表、その他の工夫
- ④オリジナリティ：独自の文体(資料の丸写し不可)、着目点、議論展開
- ⑤プログレス(PR2とFRのみ)：PR1以降の進歩

＜個別発表＞

- ①発表：簡潔にわかりやすく他履修生に自分のテーマを伝える質問に的確に答える。
- ②質疑：発表をよく聞き、的確な質問を考える。わかりやすく質問する。

4. 授業計画

- ①テーマ登録
- ②調査ガイド(文献検索について)
- ③調査ガイド(公共図書館と他大学図書館利用について)
- ④プログレスレポート1提出
- ⑤レポート返却とコメント
- ⑥個別発表
- ⑦個別発表
- ⑧個別発表
- ⑨個別発表
- ⑩プログレスレポート2提出

- ⑪レポート返却とコメント
- ⑫個別発表
- ⑬個別発表
- ⑭ファイナルレポート提出

5. 評価方法・基準

プロGRESS・レポート1 25%
(上記レポート目標①から④各25%)

プロGRESS・レポート2 30% (①から⑤各20%)

ファイナル・レポート 40% (①から⑤各20%)

発表および質疑 5%

* 総合評価60%以上が合格

6. 履修上の注意、授業時間外における学習等

第一回目の授業で注意点を述べる。

7. 教科書

ヨハン・ベックマン『西洋事物起源1-4』岩波文庫、1999年。

(担当教員が管理し、授業中に回覧した後で貸出)

8. オフィスアワー

研究室扉脇のオフィスアワー掲示を参照のこと。

Mizuikit@aol.com

日本政治論 I

Japanese Politics、Past and Present I (金曜3限)

全学科 第2、3、4年次 前期 選択 2単位

担当教員 本田 逸夫

1. 概要

近現代日本の構造的な諸問題や政治・社会思想について、何冊かの本(の抜粋)や資料などを精読して学問的に(ジャーナリストチックに、ではなく)学ぶ。日本政治の研究といっても、狭い一国(史)的な視野におちいらないためには、欧米や東北アジアなどの諸国との比較が欠かせない。現代を準備した歴史的過程の検討も重要である。こうした考察を通して、日本の政治と社会の特徴や性格、それらを形成した諸条件、そして今後の課題などを探りたい。講義は、会読をもとに発表と討論によるゼミ方式で行う。

上級科目の授業として、学生諸君の関心を重んじながら、政治学の多様な問題について意欲的な勉強を進めていく。

2. キーワード

比較政治(制度)論、政治史、政治思想史、公共性、多元主義。

3. 到達目標

各自の関心に基いて問題設定・分析・検証を行ない、分析と考察を論理的に表現できることをめざす。とくに報告と討論により、思考の深化と多面的な認識を形成する訓練を重ねる。これらの作業は、コミュニケーション能力の向上にも当然つながるはずである。

4. 授業計画

第1回 イントロダクション。

第2回 人間性と政治(権力分立の問題など)。

第3回 自由・人権観。

第4回 戦後社会と管理化(1)。

第5回 戦後社会と管理化(2)。

第6回 戦後社会と管理化(3)。

第7回 東北アジアと日本(1)。

第8回 東北アジアと日本(2)。

第9回 東北アジアと日本(3)。

第10回 補足と展開。

第11回 琉球・沖縄と日本(1)。

第12回 琉球・沖縄と日本(2)。

第13回 宗教と政治(1)。

第14回 宗教と政治(2)。

第15回 戦争・戦後責任論。

ただし、学生諸君の関心やテキストなどの要因にしたがって、計画の調整・変更は柔軟に行なう。

5. 評価方法・基準

報告と討論(80%)・レポート(20%)で評価する。

60点以上を合格とする。

6. 履修上の注意事項、授業時間外における学習等

本講義では、参加者が問題関心をもって積極的に学ぶことが特に重要である。具体的には、資料の丁寧な読みとよく準備された明晰な発表、論理的で知的に生産的な討論——独断や印象批評の応酬ではなく——を活発に行なうことなどが、求められる。

元来、政治学は広範囲の知識と関心が必要であり、参加者には生き生きとした現代的で知的な関心と着実な学力(知識、読解・思考、表現等)の両方が期待される。ただし、学力が初めは不足していても落胆する必要はない。その未熟さを補う旺盛な意欲をもって参加してもらいたい。具体的には、歴史、思想、社会等々の基本的な知識、日本語能力などを復習(自ら補習)することが必要である。プリントを含むテキストを講義の前に読み、討論に備えてくるべきことは、いうまでもない。

7. 教科書・参考書

●教科書 プリントを配布する他、相談して決定(複数)。

●参考書 講義の中で適宜紹介する。

8. オフィスアワー等

月曜日12時-13時30分。質問などは講義中・講義の前後、オフィスアワーの他に、次の電子メールでも受け付ける。

email:honda@dhs.kyutech.ac.jp

日本政治論Ⅱ

Japanese Politics、Past and Present Ⅱ （金曜3限）

全学科 第2、3、4年次 後期 選択 2単位

担当教員 本田 逸夫

1. 概要

近現代日本の構造的な諸問題や政治・社会思想について、何冊かの本（の抜粋）や資料などを精読して学問的に（ジャーナリストックに、ではなく）学ぶ。日本政治の研究といっても、狭い一国（史）的な視野におちいらないように、欧米や東北アジアなどの諸国との比較が欠かせない。現代を準備した歴史的過程の検討も重要である。こうした考察を通して、日本の政治と社会の特徴や性格、それらを形成した諸条件、そして今後の課題などを探りたい。講義は、会読をもとに発表と討論によるゼミ方式で行う。上級科目の授業として、学生諸君の関心を重んじながら、政治学の多様な問題について意欲的な勉強を進めていく。

2. キーワード

比較政治（制度）論、政治史、政治思想史、公共性、多元主義。

3. 到達目標

各自の関心に基いて問題設定・分析・検証を行ない、分析と考察を論理的に表現できることをめざす。とくに報告と討論により、思考の深化と多面的な認識を形成する訓練を重ねる。これらの作業は、コミュニケーション能力の向上にも当然つながるはずである。

4. 授業計画

第1回 イントロダクション。

第2回 自由主義論（1）。

第3回 自由主義論（2）。

第4回 諸文明と「国際化」（1）。

第5回 諸文明と「国際化」（2）。

第6回 諸文明と「国際化」（3）。

第7回 市民社会論（1）。

第8回 市民社会論（2）。

第9回 市民社会論（3）。

第10回 補足と展開。

第11回 厚生行政をめぐる政治（1）。

第12回 厚生行政をめぐる政治（2）。

第13回 厚生行政をめぐる政治（3）。

第14回 政治的リアリズム。

第15回 日本の戦後政治史をめぐる。

ただし、学生諸君の関心やテキストなどの要因に従って、計画の調整・変更は柔軟に行なう。

5. 評価方法・基準

報告と討論（80%）・レポート（20%）で評価する。

60点以上を合格とする。

6. 履修上の注意事項、授業時間外における学習等

本講義では、参加者が問題関心をもって積極的に学ぶことが特に重要である。具体的には、資料の丁寧な読みとよく準備された明晰な発表、論理的で知的に生産的な討論——独断や印象批評の応酬ではなく——を活発に行なうことなどが、求められる。元来、政治学は広範囲の知識と関心が必要であり、参加者には生き生きとした現代的で知的な関心と着実な学力（知識、読解・思考、表現等）の両方が期待される。ただし、学力が初めは不足していても落胆する必要はない。その未熟さを補う旺盛な学習意欲をもって参加してもらいたい。具体的には、歴史、思想、社会等々の基本的な知識、日本語能力などを復習（自ら補習）することが必要である。プリントを含むテキストを講義の前に読み、討論に備えてくるべきことは、いうまでもない。

7. 教科書・参考書

●教科書 プリントを配布する他、相談して決定（複数）。

●参考書 講義の中で適宜紹介する。

8. オフィスアワー等

月曜日12時～13時30分。質問などは講義中・講義の前後、オフィスアワーの他に、次の電子メールでも受け付ける。

email:honda@dhs.kyutech.ac.jp

社会システム論Ⅰ

Social Systems Theories Ⅰ （金曜3限）

全学科 第2、3、4年次 前期 選択 2単位

担当教員 井上 寛

1. 概要

●授業の背景

工学あるいは科学・技術とその成果は社会と直結しており、社会科学的な知識と認識能力の習得は必須の要請である。

●授業の目的

社会のミクロ理論としてのゲーム理論を学ぶ。

●授業の位置づけ

ゲーム理論をとその応用を学ぶことを通して、社会現象のメカニズムの基礎となる相互作用過程の理解のための理論を学習し、あわせて現代社会にかんする視野を広げることをめざす。

2. キーワード

合理的選択、ナッシュ均衡、囚人のジレンマ、混合戦略、部分ゲーム完全均衡、情報不完備

3. 到達目標

ゲーム理論の基礎概念と基礎理論を学び、社会的相互作用と制度を分析する能力を修得することを目標とする。

4. 授業計画

第1回 合理的選択と人間行為

第2回 同時決定の場合の標準形ゲーム

第3回 混合戦略

第4回 囚人のジレンマ

第5回 マックスミニ戦略とミニマックス定理

第6回 展開形のゲーム

第7回 不完全情報

第8回 繰り返しゲーム

第9回 情報不完備ゲーム

第10回 情報不完備ゲーム

第11回 共有地の悲劇

第12回 契約と交渉

第13回 協力・制度・権力

第14回 進化ゲーム

第15回 試験

5. 評価方法・基準

中間試験(20%)、期末試験(30%)、授業中の積極性(30%)、レポート(20%)で評価する。100点満点のうち60点以上の場合を合格とする。

6. 履修上の注意事項、授業時間外における学習等

予習・復習と演習・プレゼンテーションに積極的であることが要求される。

7. 教科書・参考書

最初の授業、また期間中に適宜紹介する。

8. オフィスアワー（面談時間）等

井上の研究室（共通教育研究棟3階）の前とホームページの掲示板に掲示している。

社会システム論Ⅱ

Social Systems Theories Ⅱ (金曜 3 限)

全学科 第 2、3、4 年次 後期 選択 2 単位

担当教員 井上 寛

1. 概要

●授業の背景

工学あるいは科学・技術とその成果は社会と直結しており、社会科学の知識と認識能力の習得は必須の要請である。

●授業の目的

社会の構造理論の一つとして社会ネットワーク理論を学ぶ。

●授業の位置づけ

社会ネットワーク理論とその応用を学ぶことを通して、社会関係および社会構造一般をネットワーク構造として理解する能力を習得し、あわせて現代社会にかんする視野を広げることをめざす。

2. キーワード

ネットワーク、中心度、クリーク、ブロックモデル、構造ホール、ネットワーク複合、ネットワーク形成、ネットワークゲーム

3. 到達目標

社会ネットワーク理論の基礎概念と基礎理論を学び、社会関係と社会構造を分析する能力を修得することを目標とする。

4. 授業計画

第 1 回 ネットワークの考え方

第 2 回 グラフ理論の基礎

第 3 回 中心性

第 4 回 中心性

第 5 回 クリーク

第 6 回 クリーク

第 7 回 ブロックモデル

第 8 回 ブロックモデル

第 9 回 ダイアドアの分布

第 10 回 ネットワーク形成

第 11 回 ネットワーク形成

第 12 回 ネットワークゲーム

第 13 回 社会過程とネットワーク

第 14 回 社会過程とネットワーク

第 15 回 試験

5. 評価方法・基準

中間試験 (20%)、期末試験 (30%)、授業中の積極性 (30%)、レポート (20%) で評価する。100 点満点のうち 60 点以上の場合を合格とする。

6. 履修上の注意事項、授業時間外における学習等

予習・復習と演習・プレゼンテーションに積極的であることが要求される。

7. 教科書・参考書

最初の授業、また期間中に適宜紹介する。

8. オフィスアワー（面談時間）等

井上の研究室（共通教育研究棟 3 階）の前とホームページの掲示板に掲示している。

都市経済学 Urban Economics (金曜 3 限)

全学科 第 2、3、4 年次 前期 選択 2 単位

担当教員 李 友炯

1. 概要

●授業の目的

戦後、世界各国において都市化が急速に進行しており、日本の場合人口の約 6 割以上が都市に居住している。本授業では、我々の経済活動の中心になっている都市を経済学の観点から考えてみる。特に、都市経済学の理論や分析手法を習得することによって都市の形成・立地問題をはじめ、様々な都市問題を考えると同時にその政策に対する理解を深める。

●授業の位置付け

政府や住民が都市に居住しながら直面している様々な問題を理解し、その解決策を考える上で必要な基礎知識を学ぶ。また、外国語（英語）を輪読することによって都市経済学の基礎的な知識や英語の専門用語を習得する。

2. キーワード

「都市化」、「立地」、「住宅」

3. 到達目標

- ・都市経済学の基本的な考え方や理論の理解
- ・都市問題に対する諸政策の理解

4. 授業計画

① Definitions of Cities and Urban Growth

② Aggregate Analysis of Metropolitan Areas

③ Land Use Controls

④ Housing problems and Policies

5. 評価方法・基準

授業への参加、レポート、テスト考慮し、総合的に評価する。

6. 履修上の注意事項、授業時間外における学習等

経済に関する理解を深めるために、Video on Demand (VOD) の企業革命 [英語 (日本語字幕入り) 版] の視聴を進める。VOD は付属図書館のホーム・ページから視聴可能。

7. 教科書・参考書

W. T. Bogart (1998), The Economics of Cities and Suburbs, Prentice Hall. の一部を随時配布する。

8. オフィスアワー

火曜日 14:00 ~ 16:00

質問や授業に関する意見があれば授業の前後いつでも受け付けます。

産業と規制の経済学 Industrial Organization (金曜3限)

全学科 第2、3、4年次 後期 選択 2単位

担当教員 李 友炯

1. 概要

●授業の目的

本講義では、産業組織論における多様なテーマを取り扱い、現代の産業や企業の行動を理解するための基礎知識を習得する。特に、「市場メカニズム」の意義と役割に対する理解を通じて、産業組織の問題点やその対策について考察する。

●授業の位置付け

市場の構造や産業政策の影響などを供給サイドから分析することによって市場が有効に機能するために必要な条件に対する理解を深める。また、外国書(英語)を輪読することによって産業組織論の基礎的な知識や英語の専門用語を習得する。

2. キーワード

「産業政策」、「企業」、「市場」、「規制」

3. 到達目標

- ・市場経済のメカニズムを産業組織の状況や理論を通じて理解する。
- ・政府による規制や規制緩和など産業政策の重要性を理解する。

4. 授業計画

- ① What Is Industrial Organization ?
- ② Market Structures and Market power
- ③ Perfect Competition, Monopoly and Oligopoly
- ④ Government Policies

5. 評価方法・基準

授業への参加、レポート、テスト考慮し、総合的に評価する。

6. 履修上の注意事項、授業時間外における学習等

経済に関する理解を深めるために、Video on Demand (VOD) の企業革命[英語(日本語字幕入り)版]の視聴を進める。VODは付属図書館のホーム・ページから視聴可能。

7. 教科書・参考書

L. B. Cabral (2000), Introduction to Industrial Organization, The MIT Press, D. W. Carlton and J. M. Perloff (2005), Modern Industrial Organization の一部を随時配布する

8. オフィスアワー

火曜日 14:00 ~ 16:00

質問や授業に関する意見があれば授業の前後いつでも受け付けます。

教育システム論

Educational Systems Theory (金曜3限)

全学科 第2、3、4年次 後期 選択 2単位

担当教員 東野 充成

1. 概要

●授業の目的

教育システムは、それ自体で自律したシステムを形成する一方、他の社会システムと密接不可分な関係を持ち、社会変動や社会的再生産に与している。本講義では、教育システムと司法システム、福祉システムとの接点に発生する少年非行現象を取り上げ、少年非行の社会的背景やそれが教育システム等に及ぼす影響、通俗的な少年非行言説を批判的に検証する視点を獲得する。

●授業の位置付け

少年非行統計の見方、少年非行の原因論、少年非行の事例研究、教育システム・司法システム・福祉システムと少年非行とのかわりなどについて、順次講義していく。また、参加者には、少年非行問題に関して1回程度プレゼンテーションを求め、それに対し全員で討議する。

2. キーワード

少年非行 少年法 社会問題の構築主義 非行下位文化 アノミー論 ラベリング論

3. 到達目標

- ① 少年非行の現状に対する理解を深める
- ② 通俗的な少年非行言説を批判的に検証しうる視点を獲得する。
- ③ プレゼンテーションやレポート作成など、表現能力を高める。

4. 授業計画

授業は講義・演習形式で行う。配布資料、視聴覚教材を適宜使用する。また、1回程度、与えられたテーマに関してプレゼンテーションを求め、全員でその内容について討議する。

- 1回 少年非行統計の見方
- 2回 構造機能主義的原因論
- 3回 シカゴ学派の理論
- 4回 ラベリング論と社会問題の構築主義
- 5回 欧米における少年非行対策の変遷
- 6回 日本の少年非行対策の変遷と少年法改正問題
- 7回 環境管理と監視社会
- 8回~13回 事例研究・判例研究
- 14回 まとめ
- 15回 試験

5. 評価方法・基準

プレゼンテーション・討議での発言など平素の授業態度 50%
期末レポート 50%

プレゼンテーション内容、発言内容、レポートの評価に当たっては、論理的に論が展開されているかを重視する。

6. 履修上の注意事項、授業時間外における学習等

●授業の中で指示する参考文献、記事、判例等を授業時間外に読んでおくこと。

●その他、少年事件や少年非行対策に関する最新の動向に注意すること。

7. 教科書・参考文献

●教科書 特に指定しない。

●参考文献

授業の中で適宜指定する。

8. オフィスアワー

研究室扉の掲示を参照のこと。なお、授業に関する質問等は、下記のメールアドレスで随時受け付ける。

higashi@dhs.kyutech.ac.jp

科学日本語 Basic Technical Writing

全学科 第2～4年次 後学期 選択 2単位

担当教員 アブドゥハン恭子、橘 武史

1. 概要

●授業の目的

中心に述べられていること、キーワードなどを意識しながら語を聞き取る力を養う。まとまりのある文章を書く力を養う。論理的に考え、根拠をきちんと示して自分の意見を述べる力を養う。また、エンジニアとして科学日本語に出会う場面を知り、どのようなコミュニケーション能力が必要か考える。

●授業の位置付け

2年生以上で、エンジニアとして必要なコミュニケーション能力を身に付けたい、つまり、事実に基づいて考察し、自分の意見を明確に述べるができるようになりたいと思う学生を対象とする。初めから書ける必要はない。ただし、他人の意図を理解しようとして聴く力が必須である。

2. キーワード

「科学技術」「要旨」「意見文」「根拠」「エンジニア」

3. 到達目標

- ・キーワードや段落構成を考えながら要旨が書ける
- ・根拠に基づいて自分の意見が述べられる
- ・技術の背景や将来性についてより広い見方ができる
- ・エンジニアとして必要なコミュニケーション能力に関して自己評価ができる

4. 授業計画

科学技術を題材にした視聴覚資料あるいは特別講義を聴いて、まず文章の構成を考えつつ要旨をまとめる練習をする。その要旨についてピア（学生同士の）評価を行う。次に、その技術の意義や将来性について討議し、根拠を示しつつ自分の意見をまとめる練習をする。また、第1、4、8回にはエンジニアとして実際に遭遇する場面例を紹介し、そこでどのような資質が求められるかなどについても議論する。

- 第1回 オリエンテーション：まずやってみる；日本語で科学はできない？
- 第2回 要約のしかた（1）キーワードを探す；バイオメトリクス認証
- 第3回 要約のしかた（2）段落を作る；安全技術車
- 第4回 要約のしかた（3）中心文を置く；折り紙の不思議
- 第5回 要約のしかた（4）まとめの書き方；ペットボトルリサイクル
- 第6回 意見を書く（1）感想から出発；スペースシャトル事故
- 第7回 意見を書く（2）どこに注目するか；無人IT基地
- 第8回 意見を書く（3）事実の見方は正しいか；脳科学の応用
- 第9回 意見を書く（4）別の視点から見たら；ICTタグ
- 第10回 意見を書く（5）将来的には？；ナノテクで人体を作る
- 第11回 特別講義を聴いて討議する：電磁波の生体に対する影響（岡本良治先生）
- 第12回 特別講義を聴いて討議する：バリアフリー技術におけるニーズの衝突（寺町賢一先生）
- 第13回 特別講義を聴いて討議する：車なし社会の実現（橘武史先生）
- 第14回 まとめ ー自己評価と授業評価ー

5. 評価方法・基準

毎回の要旨（40%）、授業への参加度（20%）、意見文課題（40%）の伸びで評価する。

6. 履修上の注意事項、授業時間外の学習等

毎回の課題をよく推敲して提出すること。

7. 教科書・参考書

●教科書

特に指定しない

8. オフィスアワー等

月曜日4限

選択日本事情 A Elective Japanese Culture and Society A

全学科 第2～4年次 前期 選択 2単位

担当教員 アブドゥハン 恭子

1. 概要

●授業の目的

留学生と共に日本の社会や文化、歴史等に関する知見を広め、考えを深める。留学生の出身国の事情も知り、日本について様々な視野から考察する。

●授業の位置付け

日本社会に対する自分の知識を確認し、異文化について知って、視野を広げる。自国の事情を客観的に説明し、異文化を理解して自らの考えを深める異文化コミュニケーション能力を養う。

2. キーワード

「日本社会」「文化」「討論」「異文化理解」

3. 到達目標

- ① 日本社会や文化について外国人にも分かるように説明する
- ② 討議に積極的に参加して考えを深める
- ③ 異なる文化、社会について理解する。
- ④ 日本の文化、社会について各国との比較を交えて、まとまりのある文章を書く

4. 授業計画

- 第1回 アイスブレイキング：国のイメージ
- 第2回 学校生活
- 第3回 日本料理と食生活
- 第4回 しつけとマナー、人間関係
- 第5回 若者文化
- 第6回 年中行事
- 第7回 まんが（世界に発信する現代日本文化）
- 第8回 結婚と女性
- 第9回 住宅事情と住文化
- 第10回 宗教と信仰
- 第11回 労働観
- 第12回 社会保障制度
- 第13回 自殺
- 第14回 外国から見た現代日本

5. 評価方法・基準

レポート（60%）及び 毎回提出のノート・授業への参加度（40%）で評価する。

6. 履修上の注意事項、授業時間外における学習等

自分の意見を分かりやすく伝えようと努力すること。相手の実情を理解しようとし、日本との違いはどこからくるのか考えを深めること。関連する項目について図書館等で資料を探して学習する習慣を身につけよう。

7. 教科書・参考書

●教科書

特に指定しない

●参考書

授業中に紹介する。

8. オフィスアワー等

月曜日3限

選択日本事情 B Elective Japanese Culture and Society B

全学科 第2～4年次 後期 選択 2単位

担当教員 アブドゥハン恭子

1. 概要

●授業の目的

毎週のニュースを題材にして、日本の社会的な問題について知見を広げ、留学生と共に討論して日本の社会についての理解を深める。

●授業の位置付け

日本社会に対する自分の知識を確認し、異文化について知って、視野を広げる。自国の事情を客観的に説明し、異文化を理解して自らの考えを深める異文化コミュニケーション能力を養う。

2. キーワード

「ニュース」「日本社会」「異文化理解」

3. 到達目標

- ・現代の社会的な問題を知り、その背景や対策などについて話し合う
- ・日本の社会現象について説明し、自分の意見を含めて、まとまりのある文章を書く

4. 授業計画

学生自身がその時々のニュースや話題になっている出来事から興味のある話題を取り上げて、紹介する。皆で討議する問題を提起する。教師が補足的な説明、資料提供などを行って、その社会的な問題について理解を深める。

その背景や対策について意見を出し合い、自分の意見をまとめる。

5. 評価方法・基準

発表（50％）及び毎回のノート（30％）授業への参加度（20％）で評価する。

6. 履修上の注意事項、授業時間外における学習等

日頃から報道されるニュースに関心を持つこと。図書館で複数の新聞を読む習慣をつけよう。

7. 教科書・参考書

●教科書

特に指定しない

8. オフィスアワー等

月曜日3限